

もし、一日前に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

いちにちまえ
—『一日前プロジェクト』報告書—

平成21年3月

内閣府

はじめに

私たちは、大地震や水害に見舞われるたびに自然の脅威を思い知らされますが、多くの場合、時が経つに連れその思いも薄らぎ、家具や備品の固定といった身近な備えさえも怠りがちです。それは、どこかに「自分だけは大丈夫」という勝手な思い込みがあるからではないでしょうか。

「一日前プロジェクト」は、災害の恐ろしさや事前に備えておくことの大切さに気づくきっかけになればと、平成18年度にスタートしました。以来、「もし、災害の一日前に戻れたら、あなたは何をしますか？」をテーマに、全国各地の被災者や災害対応に携わった方々に、その時どのように行動し、どのような思いを抱いたか等を話してもらい、その話を基に教訓や「気づき」につながる小さな物語を生み出すことに力を注いできました。

今年度は、新たに101編の物語が誕生しました。話し手は20代から70代と幅広い年齢層の方々です。同年代の方の体験を自分に置き換えてみたり、他の年代の方の体験をご家族などの身近な方に置き換えてみたりすることにより、災害を疑似体験していただき、実際に災害への備えを始めることになればと願っています。

これまでに作成された物語は全て、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」に掲載しています。物語やイラストは、非営利の目的であれば自由に使うことができますので、地域や職場、学校等で防災について考える際の教材として、また、広報誌やパンフレットの素材として広くご活用ください。

内閣府（防災担当）

国民運動のホームページ：<http://www.bousai.go.jp/km/>

目 次

I. 一日前プロジェクトの概要P1

II. 平成20年度実施要領P2

III. 一日前プロジェクトのエピソードについてP3

平成20年度「一日前プロジェクト」 エピソード一覧P5

〔編集後記〕

一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？P110

I. 一日前プロジェクトの概要

「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただき、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「**災害被害を軽減する国民運動**」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心を引き起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

II. 平成20年度実施要領

	対象災害	ヒアリング実施地区		ヒアリング対象者	ヒアリング実施日
1	阪神・淡路大震災 (平成7年1月)	兵庫県	神戸市 淡路市	住民 学生、社会人 市職員	平成21年 1月11日～13日
2	平成17年台風第14号 (平成17年9月)	宮崎県	宮崎市 延岡市	住民 消防団員	平成21年 1月31日
3	平成18年台風第13号 (平成18年9月)	宮崎県	延岡市	住民	平成21年 2月1日
4	平成20年8月末豪雨 (平成20年8月)	愛知県	名古屋市 幸田町 岡崎市	住民 ボランティア	平成21年 2月3日、4日
5	平成16年台風第23号 (平成16年10月)	兵庫県	豊岡市	会社経営者 住民	平成21年 2月18日
6	平成18年梅雨前線に よる豪雨	長野県	下諏訪町 諏訪市	ボランティア 企業従業員	平成21年 2月19日、20日

Ⅲ. 一日前プロジェクトのエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

平成20年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
地震・津波	両親に買ったマンション、初めて泊った翌朝に地震	近畿	家庭	阪神・淡路大震災 (平成7年1月)	9
	ぬいぐるみ抱えて母のもとへ				10
	お母さんの顔も揺れていた				11
	マンガ見たいのに、ずっと地震				12
	お父さんになったみたいに頼もしかったお母さん				13
	知っていれば良かった、地震のこと				14
	急に大家族 ～いつもと違うお母さん～				15
	重装備にマスクで通勤 ～大変だったお父さん～				16
	地震で起業に失敗 ～めげなかったお父さん～				17
	母に学んで、地震に備え ～お風呂に水ため、食料も買い置き～				18
	再現映像で震災の光景一気に思い出す				19
	なぎ倒された煙突にショック ～ランドセル姿で見守った祖母宅の解体～				20
	2階で寝ていて助かった ～逃げ出す時に切った足、入浴時に気づく～				21
	妻が家具の下敷き ～「あんたが上に乗ってたん？」の冗談でほっと～				22
	まず老人会の会長さんをひっぱり出し ～地域の役割のある人から声かけ～		23		
	知らなかった土壁の壊し方		24		
	知っていれば良かった救急救命法		25		
	ご近所で「あげます」「いります」 ～玄関前にボードで貼りだし～		26		
	残る火見ながら「これはアカン」 ～気を取り直して向かった消防署に支援のレスキュー隊～		27		
	駅前にワゴン車持ち出し町内の対策本部 ～有効だったホワイトボード～		28		
	建設業の父、広島から被災地へバスユニット		29		
	閉じ込められた愛犬に救いの手		30		
	避難所に電気マット持ち込み、何度も落ちたブレーカー	31			
	大学の授業再開に違和感 ～父の手伝いで被災地支援～	32			
	商店街の再開、翌日に話し合い ～行政に働きかけ12軒で仮店舗～	33			
	出勤か、救助か、悩む ～誰かがジャッキ、12人助ける～	34			
	バジャマに作業着で部下出勤 ～思わず注意し、被災度の違い知る～	35			
	母の防災意識で命助かる ～つぶれた庁舎見て震災の激しさ初めて自覚～	36			
大学や自治体からの無茶な資料請求に困惑	37				
出向中で行き場なし ～自分で職場探してイザ出勤～	38				
			企業・職場		
			地域・ご近所		
			行政		

平成20年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
風水害	のんびり聞こえた「避難勧告」 ～緊迫感なかった防災無線～	近畿	家庭	平成16年台風第23号 (平成16年10月)	39
	急きょ地元へ避難所開設 ～訓練どおりに事は運ばず～		地域・ご近所		40
	コウノトリとの共生に新たな希望		41		
	会社の前のパレット見あたらず ～倉庫の中はグシャグシャ～		42		
	洪水翌日、「とにかく負けるな」と社員にメール		43		
	製品はすべて産業廃棄物 ～10トン車で6回捨てて操業再開～		44		
	日が暮れるまで商品廃棄 ～助かったボランティア支援～		45		
	データの復旧がクリスマスプレゼント ～水害から2カ月で～		46		
	水没のコンバインまで保険でカバー		47		
	しなかった台風前の畳上げ ～ポンプ場でき、備えおこたる～	九州	家庭	平成17年台風第14号 (平成17年9月)	48
	保険は絶対必要 ～見積もり中で、間に合わず～				49
	避難所のテレビで発見、泥水に浸かるわが家				50
	子供の頃の写真も、卒業写真もなくなった				51
	水害の後始末に3カ月				52
	おとなりさんがいない! ～腰まで浸かっておとしよりの救出～		53		
	真夜中に必死で伝えた避難指示		54		
	命綱つけて濁流の中を泳いだ ～おとしより救助も命かけ～		55		
	泥まみれで後かたづけ ～3日目のお風呂でホッとひと息～		56		
	山道の運転は命かけ ～のんきな自分にあきれ～	中部	家庭	平成18年 梅雨前線による豪雨 (平成18年7月)	57
	立入禁止でも危機感なく ～ズボンの裾まくり水の中を自宅へ～				58
	長靴流され、泥の中を避難				59
	車を高台に避難させ、自分のみぞにはまる				60
	車の通行で二次災害 ～水圧でガラス割れ～				61
	水害直後は雪かき道具、乾いてからはつるはし				62
	軽トラックの「おせっかい隊」が出前ボランティア		地域・ご近所		63
	避難者受け入れで大混乱				64
	ご近所の方も撮っておけばよかった被害写真				65
	出先事業所に伝わらなかった本社の被害状況 ～なぜ休みと問い合わせ相次ぐ～		企業・職場		66
20年以上前の水害の教訓が生きた ～出張中の社員をゴム長で救出～	67				
失敗を教訓に、全社いっせいの訓練	68				

平成20年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
風水害	うちの事業所に、本社の危機管理委員会がやってきた	中部	企業・職場	平成18年 梅雨前線による豪雨 (平成18年7月)	69
	本社役員の家から「土のう積んで」とSOS				70
	消防団員の従業員に特別休暇				71
	「まだまだ長雨」と最悪のシナリオを考える				72
	臨時休業でも、気になっていたお客様との約束				73
	道路に植木の箱がブカブカ	中部	家庭	平成20年8月末豪雨 (平成20年8月)	74
	マイカー水没の経験生かす				75
	雷が激しく鳴ったら大雨に注意				76
	停電でケーブルテレビ映らずワンセグで雨量知る				77
	10分たらずで床上138センチ ～助けたのは愛犬だけ～				78
	「おやじ、避難しろ」で目がさめた ～気づいたら浮いた量の上～				79
	走る車で浸水拡大				80
	「ボランティアします」新聞販売店でPR				81
	交差点で車が水泳				82
	ひとり暮らしだけどひとりじゃない ～みんなに助けられて幸せ～				83
	災害は地震だけじゃない ～水害への備えも必要なボランティア～	84			
	被災したら、私は「助けてください」と声を上げます	中部	地域・ご近所	平成20年8月末豪雨 (平成20年8月)	85
	寝ながら携帯電話にぎりしめ				86
	欲しかった通行止めの表示板 ～制止ふり切り、車が水没～				87
	住民もボランティアで田んぼのごみ拾い				88
	助けてあげたかったおとなりの奥さん				89
	見舞いの車や路上のごみで収集車入れず				90
	町内にボランティアのサテライト ～地元の問題解決にひと役～				91
	水害の片づけより予約客 ～気丈に働くベテラン美容師～				92
	水田にあふれた水から威圧感				93
	稲刈り直前、水に浸かって収穫できず				94
すばやかた区役所の対応 ～ボランティア業務をサポート～	行政	行政	平成18年台風第13号 (平成18年9月)	95	
「ひまわり」の雲画像見て異変気づく ～魚釣りの趣味活かし～				96	
風水害 (竜巻)	ドーンと音がして電車が横転 ～瓦や角材が水平に飛んだ～	九州	地域・ご近所	平成18年台風第13号 (平成18年9月)	97
	頭の中に要援護者名簿 ～すばやく一人暮らしのおとしよりの安否確認～				98

平成20年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
風水害 (竜巻)	やじ馬の車整理に大活躍 ～やっぱり頼れる消防団～	九州	地域・ご近所	平成18年台風第13号 (平成18年9月)	99
災害共通	恐かった近所のおばちゃんに「がんばりや」と言われて奮起	近畿	地域・ご近所	阪神・淡路大震災 (平成7年1月)	100
	うれしかったお風呂屋さんでの親切 ～アレルギーの弟助かる～				101
	手紙書く場所も作れなかった避難所運営を反省		行政		102
	もっと自治会に参加して!	九州	地域・ご近所	平成17年台風第14号 (平成17年9月)	103
	ないと不自由だったハブラシ	中部	家庭	平成18年 梅雨前線による豪雨 (平成18年7月)	104
	災害に備え、年末には帰宅訓練		企業・職場		105
	1時間で開始、公民館の炊き出し	九州	地域・ご近所	平成18年台風第13号 (平成18年9月)	106
	みんなで守る地域の高齢者 ～民生委員さんと一緒に「見守り隊」～				107
	すぐ来てくれた市の相談窓口		行政		108
バスタオルの防災ずきんでコミュニケーション	中部	地域・ご近所	平成20年8月末豪雨 (平成20年8月)	109	

平成20年度「一日前プロジェクト」
エピソード集

両親に買ったマンション、初めて泊った翌朝に地震

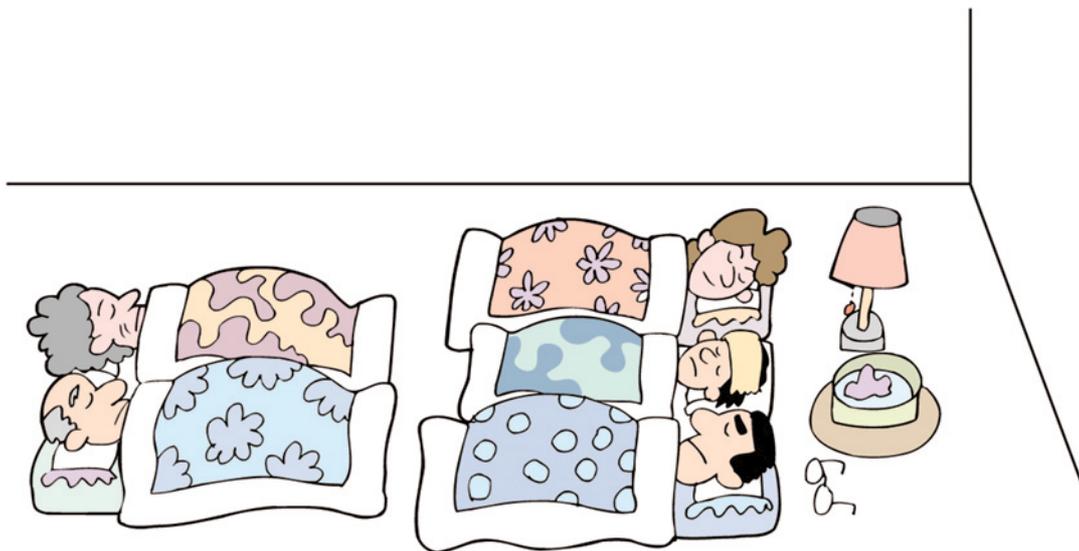
（神戸市 50代 男性）

結婚して、しばらく郊外に住んでいましたが、同居している家内の両親が病弱で、救急車で運ばれることもあったものですから、病院に近いところ、救急車がすぐ来てくれるような便利なところがいいなと思っていました。

神戸市長田区の私の実家の近くに新築のマンションができたので、「じゃ、まあ、両親を住ませるために」と買ったのです。家族みんなの住民票だけを先に移して、カギの引き渡しを受けたのが地震の前の年の1994年12月でした。

年が明けた1月15日が日曜日で、次の日も成人の日の振替休日で連休だったので、両親が住む前に「みんなで、いっぺん泊ってみようや」と、家族総出で泊まりに行きました。

1泊して郊外のニュータウンに戻る予定だったのですが、どういうわけか長男坊が風邪を引いてしまい、「じゃあ、もう1晩」ということになりました。その時は、翌朝にあの大地震を体験するなんて、夢にも思っていませんでした。その場にいたことで、こうやって子供のころから過ごしてきた地元で、復興のまちづくりに没頭している自分がいると思うと、不思議な気分になるんです。



ぬいぐるみ抱えて母のもとへ

（神戸市 20代 男性 学生）

あのときちょうど、僕は小学1年生でした。寝ていたら、急にドーンという大きな音がしたんです。その音で目が覚めると、何か地鳴りみたいなものがこちに近づいてくるような、ゴゴゴという音がどんどんどんどん大きくなってきて、それからまたドーンという音がして、突き上げられるような揺れを感じました。

僕は、2段ベッドの下に寝ていたんですけども、何が起こったのか全くわけがわかりませんでした。ただ、何か大変なことが起こったということだけはわかったので、一緒に寝ていたシャチのぬいぐるみをわきに抱えながら、必死で母親のもとへ行きました。

たまたま僕の家は、建ててまだ1年も経っていなくて、地震に強かったんですね。家の壁とかにヒビは入ったけれど、タンスとかも倒れなかったし、食器は何枚か割れたりはしたんですけども、食器棚の観音開きの扉は、磁石が結構強力で開かなかったので、中の食器が飛び出すこともなかったのです。

部屋の中は、本棚から本が飛び出したり、しまってた物が全部外に出たりして、足の踏み場がないほどでしたが、ガラス類が落ちて割れることはなかったので、ケガをする心配もありませんでした。



お母さんの顔も揺れていた

（神戸市 20代 女性 学生）

当時私は小学校の1年生だったのですが、一人っ子だし、母と1つの部屋で、寝ていました。地震の時は、お母さんに名前を呼ばれて、ぱっと目が覚めたのですが、自分も揺れているんですけど、お母さんの顔も揺れていました。

真っ暗の中で寝ることがあまり好きでなかったので、オレンジ色の小さい豆電球をずっとつけて寝ていたんです。目が覚めたとき、その電球がついていたことと、長く伸ばしたあかりのスイッチのヒモが大きく揺れていたのをはっきり覚えています。

大学生になった今も「揺れ」には敏感で、ポートライナーに乗っていて揺れるとわかっていても、何か怖い。大きい道沿いにあるお店の2階にいて、トラックが道を通った時に揺れたりするのも気になるんです。



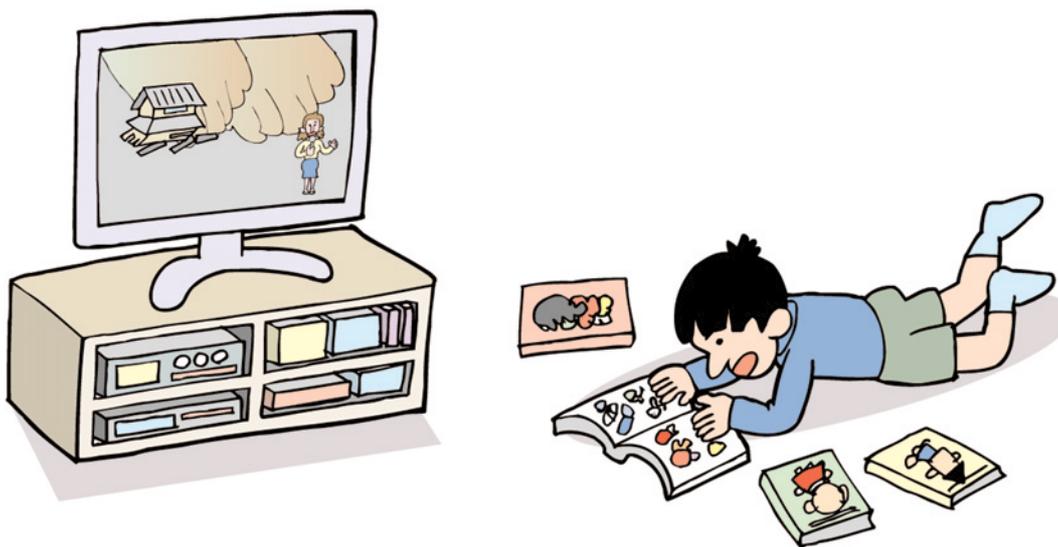
マンガ見たいのに、ずっと地震

（神戸市 20代 男性 学生）

家自体に大きな被害はなかったのですが、おばあちゃんもお母さんもお花をしていたので、たくさんあった花瓶が全部倒れていましたが、廊下に並べて置いてあったので割れはしませんでした。でも、食器関係は、もう全部こなごなに割れてしまいました。

私の部屋は、倒れるものは特に何もなかったし、お父さんの部屋も、ダンスを置いていたんですけども、衣装ダンスのさらに上に箱に入れた物を積んでいたからなのか、倒れることはなく無事でした。

子ども心に、「何か」が起こったということは分かったんですが、何が起きたのかは分かってなかったんですね。電気が戻って、すぐにテレビをつけたのだけれど、どこもニュースばかり。学校もお休みだし、子供的にはかなり暇でしたから、マンガなんかを見たいのに、どのチャンネルもずっと地震のことばかりやっていて、タイクツでした。



お父さんになったみたいに頼もしかったお母さん

（神戸市 20代 女性 学生）

たまたまその日は、お父さんが朝早く出かけていて、5歳だった私はお母さんと弟と川の字になって寝ていました。あの地震が起きた後にいつも弟が寝ているベビーベッドを見てみると、まわりに置いてあったものが全部ベッドの中に落ちていて、もしそこで寝ていたら、弟の命はなかったかもしれません。

お父さんがいない中で私や弟を助けてくれたのがお母さんで、地震が起きた瞬間は、私たちの上に乗ってからだで守ってくれました。危ないから外に出ようということになって、2階から階段を下りようとしたんやけど、真っ暗なのでお母さんが懐中電灯を探しに部屋に戻ったんですが、電池が入っていないものしか見つからなくて。心細いから私も一緒についていこうとしたら、「危ないから入ってきたらあかん」と、すごく怒られた。そのときのお母さんの姿は、何て言うんやろ、お母さんとお父さんが一緒になったみたいで、頼もしく感じました。

近くに住むお母さんのお兄ちゃんが、地震が起きて10分後ぐらいに助けに来てくれました。そのときのお母さんの顔は、すごくやわらいだというか、「やっと助けに来てくれたのね」と言っているような表情だったのをはっきり覚えています。



知っていれば良かった、地震のこと

（神戸市 20代 男性 学生）

うちは、大きな被害はなかったのですが、明るくなってからも、ドキドキしていましたが、長田のほうから黒い煙が上がっているのを、私の家から見えたことが特に記憶に残っています。だから、今でも、ちょっとした地震に敏感に反応してしまうし、花火の音にもドキっとしたりもします。

当時は小学校1年生で、地震という言葉すらも聞いたことがなかったので、物理的に被害は受けていないけれど、やはり影響は大きかったなと思っています。

地震が起きると家が揺れたりするとかということぐらい、最低限知っていれば、「ああ、地震だ」と思えたら、もしかしたらあの時、そこまでびっくりすることもなかったかもしれない。僕自身が心のケアとかを勉強してきたからかもしれませんが、地震を知っていれば、もしかしたらその後の心理的な負担とかは軽減されたのではないかなと思ったりします。



急に大家族

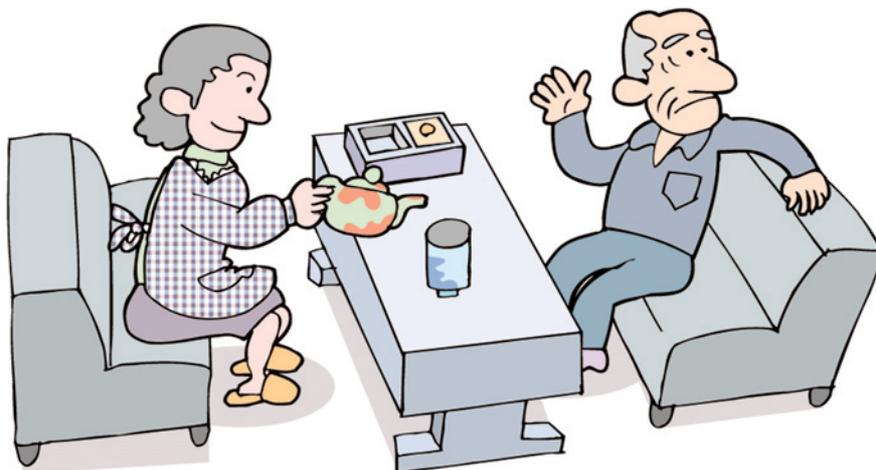
いつもと違うお母さん

（神戸市 20代 女性 学生）

当時5歳でしたが、幼稚園がいつ始まったのかは覚えていないんですよ。地震の後のことで思い出すのは、そんなに大きくもないうちの家に、おじいちゃん一家が避難してきていて、1階におじいちゃん、おばあちゃんとお父さんの妹とその旦那さん、2階にうちの家族4人で、一緒に生活をしていたことぐらい。

私たちがおじいちゃん、おばあちゃんのところに行くのは正月ぐらいやったんです。なので、一緒に暮らしていて、お母さんがいつも気を使っているのは子供ながらにわかりました。

ある時、私が缶の紅茶を飲んで、プルタブを指でカンカンカンカン鳴らしたんです。みんな地震でいろいろな音とかに敏感になっていたから、おじいちゃんが「何の音や」って、イライラした感じで大きい声を出したんです。そしたら、お母さんが「あ、子どもが遊んでいるだけです」って。言葉遣いも、いつものお母さんじゃなかったから、一緒に暮らしていた間は私もすごく敏感になっていたのを覚えています。



重装備にマスクで通勤

大変だったお父さん

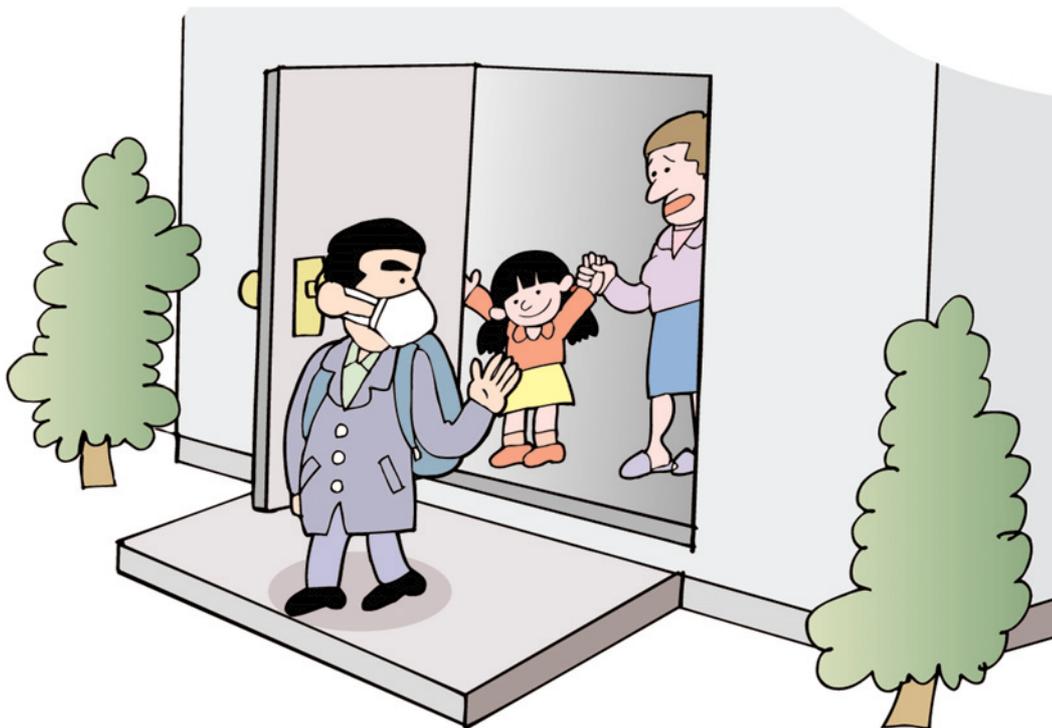
（神戸市 20代 女性 学生）

地震からしばらくすると、お父さんがこれまでと違う格好で出かけるようになりました。重装備でリュックをしょって、ごついマスクをかけていました。

町はまだ、煙とかガレキのホコリとかがひどくて、マスクをせずに歩ける状態ではなかったようです。途中でマスクを配っていたところもあるとかで、毎日いろいろなマスクをして出かけていました。

それまでは、給食当番がつけるような普通のマスクしか見たことがなかったから、仮面ライダーみたいな形をしたマスクを見た記憶が強烈に残っています。

お父さんはそれまでは電車で通勤していたけど、駅がやられていたから、途中から歩きとバスで行っていたようです。私は小さくて詳しい事情はわかりませんでした。が、「お父さんって、大変なんだな」と思っていました。



地震で起業に失敗

めげなかったお父さん

（神戸市 20代 女性 学生）

お父さんは、私が気づいたときには、庭師の仕事をしていて、10年ぐらい前に独立し、今に至っています。仕事に誇りを持って働いていて、そういうお父さんを、私は尊敬しています。

小学校の時に家族にインタビューする宿題があって、お父さんに仕事のことを聞いたんです。私はお父さんが好きやったから、きっとかっこいい理由があるんやろと思って聞いたら、お父さんは「自由に生きているバカボンのパパみたいになりたかったんや。だから庭師になったんや」と言われて、ショックを受けたことを覚えています。

高校に入ってから、お父さんは地震で失業して庭師になったことを知りました。新しい事業をしようとしていた矢先に地震が起き、地震の1週間前に200万円払って建物を借りていたのに建物が使えなくなって、そのお金も返ってこなかったそうです。事業を始めるまでのつなぎのバイトもお店が閉店になり、それから、タクシーの運転手をしたり、道路にある木を刈る仕事をしたりしたそうです。

地震で失業した人がいたことは知っていましたが、まさかお父さんがそうだったとは知らなかったのが驚きました。そう言えば、地震のあとスーツを着て仕事に出かける父の姿が、いつの間にか作業着にかわっていたのを思い出しました。



母に学んで、地震に備え

お風呂に水ため、食料も買い置き

（神戸市 20代 女性 学生）

私の家は、お母さんが節約家だったのか、もともとお風呂の水を洗濯に使っていました。

みんなトイレの水がなくて、困っていたと思うんですけども、うちはその水があったからトイレを流すのは、当分はそれでまかなえました。

それから、食料が普通に買い置きしてあったんだと思うんですけども、豊富にあったので、食べ物には困りませんでした。

たぶん、普通の生活の中で節約をしながら、何かあったときのためにもなるという考えを持ってやってくれていたんだろと思うます。やっぱり、お母さんは偉いなって思いますね。私も、いつもお母さんをみならって、明日地震が起きても、何とかなるぐらいの準備はしているつもりです。



再現映像で震災の光景一気に思い出す

（神戸市 20代 女性 学生）

地震から数日後、小学1年生だった私は、おじの家を見に行くという父についていきました。電車は止まったままでしたから、「線路が一番広くて安全」ということで、途中まで線路の上を歩いて行きました。普段は入れない線路の上を父と手をつないで歩いたので、安心なのと楽しい気持ちだったことを覚えています。被災後は、いつもは仕事や大学で帰ってこない父親や兄と、毎晩のようにトランプをしたりして、私にとってはある意味で望んでいた日常でした。

その私が、神戸の「人と防災未来センター」で震災直後の再現映像を見たときに、2駅分の線路を父と歩きながら見た一番生々しい光景を一気に思い出し、気を失って倒れてしまったんです。

行く手の向こうには火の手が見えていて、おじの家にたどりつくと、周りの家はほとんど焼け落ちてガレキ。人々が道路で固まって暖をとったり、公園のテントの横でたき火をしていたりで、いつもならないはずのおとなたちが、そんな所に集まっているというのがすごく衝撃的でした。6千人以上の方が亡くなったという現実がわかる高校生になって、いきなり思い出してしまったので、「自分は何ていうものを見たんだろう」と。

それだけの方が亡くなった中で、自分が生きのびて、これから何をしたらいいのかなと考え、大学のサークルなどで震災の経験を伝える活動に関わることになりました。



なぎ倒された煙突にショック

ランドセル姿で見守った祖母宅の解体

（神戸市 20代 女性 学生）

揺れた直後はまだ水が出ていて、2階から降りるやいなや、父が「水をすぐにためろ!」と言ったので、とりあえず器という器に、母が水をためていました。父は建築系の人なんですけど、お風呂にちょうど水がいっぱいになったぐらいで断水になったので、びっくりしました。

小学1年生の私が一番ショックだったのは、長田にあった祖母の家が取り壊されたことです。祖母の家は銭湯で、私はそこに預けられて育ったので、私にとってすごく大事な家だったんです。「全壊」の赤い紙が張られるとショベルカーでつぶされるという話を聞いていたので、1回勝手にその赤紙をはがして怒られた記憶もあります。

その日は短縮授業で、お昼ぐらいに学校から帰ると、祖母の家はもう半分ぐらいつぶされていました。銭湯で大きいので、なかなか一気にはつぶせなくて。それをランドセルを持ったまま、ずっと見ていたのを覚えています。

すごく立派な煙突が立っていたんですけど、根元からバーンと一気になぎ倒されてしまいました。丸1日で更地にされてしまった光景は、今でも鮮明に覚えています。



2階で寝ていて助かった

逃げ出す時に切った足、入浴時に気づく

（淡路市 60代 女性）

たまたま私たちは2階で寝ていたから助かったけど、下で寝ていたら完全にやられていたと思います。1階の天井が完全に落ちて、2階部分が1階のようになっていましたから。

主人が、枕元でライターをつけてくれてね。ライターで照らしながら、「入り口が開いとるから、先に出ろ」って言ったけど、2階の窓の棧やガラスが全部飛んでしまって、入り口に見えたのだろーと思います。

ちょうど私たちの寝ている枕元にコタツがあって、こっち側にあんま器があって、反対側に大きなテレビ。そのテレビとこたつとあんま器に天井が支えられていたので、私は主人が引っ張り出してくれたガウンをパジャマの上にはおり、スリッパをはいて、はって出ました。背の高いタンスは山側に倒れてくれたので、運良く、下敷きにならずにすみました。

その夜、難を逃れた妹の家でお風呂に入ろうとしたら、服がくっついて脱げないのです。

おかしいなと思ってみると、太もものあたりが切れて血が固まっていた。地震で落ちた人形ケースのガラスがふとんに突き刺さり、中の羽毛が空中に舞い上がって前が良く見えないほどでしたので、それで切ったのでしょう。割れたガラスは本当に怖いものだと思います。



妻が家具の下敷き

「あんたが上に乗ってたん？」の冗談でほっと

（淡路市 50代 男性）

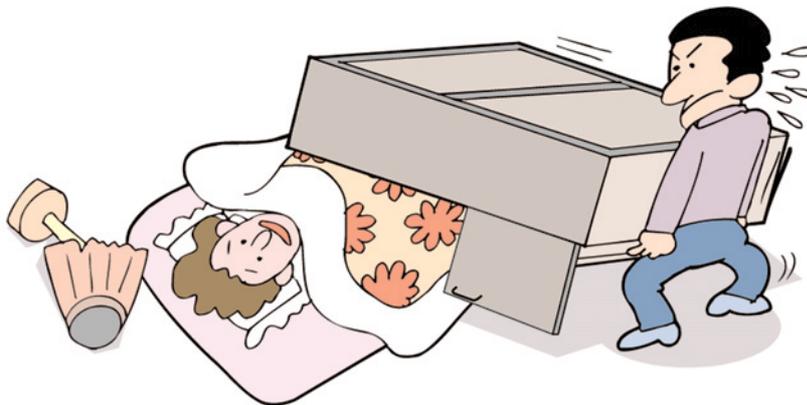
前の日は普通どおり商売して、午前2時ぐらいに寝たんかな。で、小さく揺れかけたような気がして目が覚めて、「地震や」言うて、布団の上に座ったとたん、ミシミシ、バリバリ言い出したから、「これはもうあかんで」と思ったとたん、タンスが全部倒れてきました。

女房に、「どないや」と声をかけたら、タンスの下から「大丈夫」と言う返事。「ほな、じっとしとけよ。おふくろ見てくるさかい」と言って、家を飛び出しました。

おふくろは、「お参りして、今、帰ってきたとこや」と言いながら、仏壇の前で一生懸命拜んでいるところでした。その日に限って早く帰ってきたということでしたが、もし、帰る途中に地震に遭っていたら、家々が倒れてきたので大変なことになっていたと思います。

おふくろの無事を確認できたので、すぐに家に引き返しました。なんだか痛いなと思ったら、頭から血が出ていました。手もはれていましたが、どこでどうしたのかはまったく分かりませんでした。

部屋に戻って、重たいタンスをやっとの思いで動かして、下敷きになっていた女房を引っ張り出しました。「どうもないか？」と声をかけたら、「どうもないわ。あんたが上に乗ってたのかと思っとった」と冗談言ってくれたので、ホッとしました。



まず老人会の会長さんをひっぱり出し

地域の役割のある人から声かけ

（神戸市 60代 男性）

私は自治会長だったので、地震の前の晩は夜中の1時半過ぎまで、なれない手つきでワープロでまちづくりに関する資料づくりをしていました。

ちょうど寝入りばなに、グラグラと大きな地震が起きたのです。表に出ると、となり町の空に真っ赤な火の手があがっていたので、「これはあかん」と思いました。そのあたりには、昔ながらのアーケードにつらなる市場があったので、そこに火が入ったら、アーケードに火が走ってすぐに我々の町に来るだろうと思ったのです。

自治会長の私だけでは、どうすることもできないと思って、地域の老人会の会長さんや、婦人会の会長さんとかに声をかけました。その人たちがそれぞれ自分の担当で動いてくれるだろうと思って声をかけたのですが、期待どおりしっかり行動されていました。

自分は何度か火災を経験し、火の怖さを十分知っていたので、「早く、火に近いところから助け出さなければ」と思っていました。埋もれている人の掌握にと、町を二回りしたところには、すぐそこに火が来ていました。ほんとうに火の勢いは速かったんです。



知らなかった土壁の壊し方

（神戸市 50代 男性）

地震の後は、近所のみんなと力をあわせて、こわれた家の下敷きになった人たちの救出にとりかかりました。

木造家屋のほとんどが土壁でした。土壁っていうのは困ったもので、なかなかこわれな感じです。バールで突っいたらバールが土に突き刺さってしまうし、ハンマーでたたくとハンマーの頭の形だけが凹む（へこむ）だけなのです。

だから土を削っていくしかない、少しずつ削りながら壁をくずしていきました。そうすると、今度は、竹でできた下地が出てくる。この竹っていうのが、これまたくせもので、のこぎりでもなかなか切れない。しかたがないから、人が通れるぐらいにその竹の編み目を広げて、人をひっぱり出したのです。

カケヤ*で一番上の部分をバーンとたたけば、バンと壁が外れることはあとから教えてもらいましたが、その時はみんな知らなくて。竹の下地には、ほんとうに悩まされました。

*カケヤ（掛矢）： くいなどを打ち込むときに用いる大型の木づち。



知っていれば良かった救急救命法

（神戸市 70代 男性）

ほんとうにこれを知っとけば良かったというのはね、今で言う救急法の知識ですね。

当時17歳の女の子が助け出されて、50代後半に近いおばちゃんが一生懸命人工呼吸をやっていて、私も手伝って、その子が一度は息を吹き返したんです。

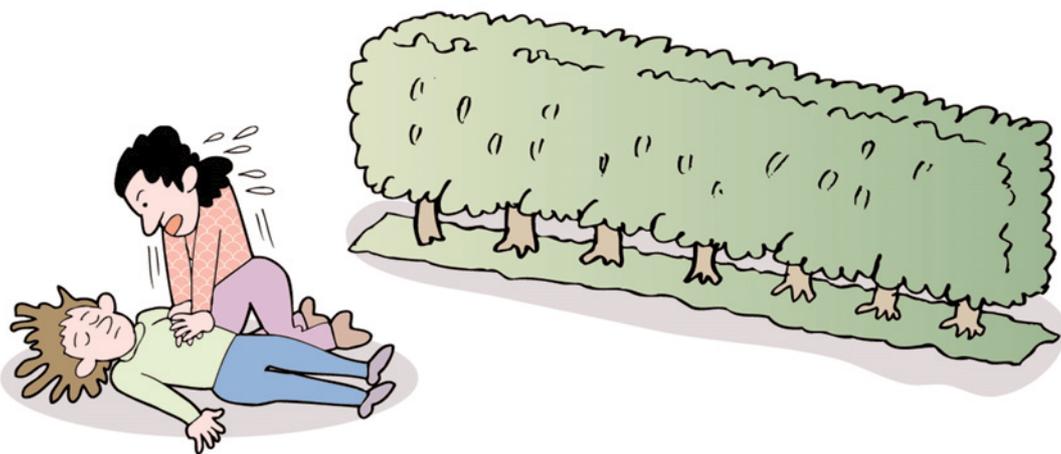
そこで私は、「息吹き返したからこれで大丈夫や」と思い、「あと、お願いします」と言ってその場を離れました。とにかく、他にも助けなければならない人がたくさんあったから。

でも、後で、その子が数時間後に窒息で亡くなってしまったということを知りました。

救急法の「気道確保」とかを知っていたら、口あけて、口の中に詰まっている土を取り出してジュースでも探してきて口をゆすいであげていたら、あの子は助かったかもしれないという思いがずっと残っています。

寝ていた場所がわかっていたら、土壁の土ぼこりを吸い込んでいるかもしれないと気づいたのかもしれないんだけど、どんな状況で助けられたのかも聞かされていませんでしたし。

実際にそういう状況で助かった子もいたようですからね。救急法の知識をもっとちゃんと身につけていれば良かったと、今でも悔やんでいます。



ご近所で「あげます」「いります」

玄関前にボードで貼りだし

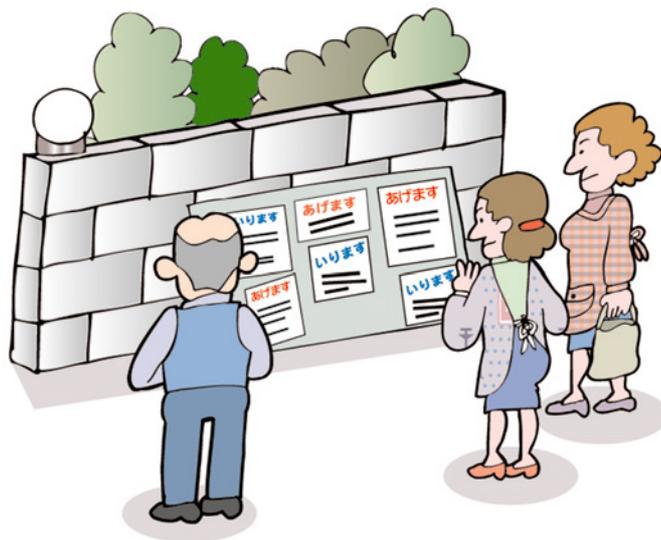
（神戸市 60代 男性）

地震後、家の中を片づけるのに大変だった時期に、近所の十数家族で避難所になった近くの小学校に、交代でみんなの朝とお昼の菓子パンを取りに行っていました。初めから決めていたわけじゃなくて、奥さん方が「今日は私が手伝います」、「じゃ、次の日は私が手伝います」って自主的に言ってくれたのが始まりでした。

しばらくたってから、家の前に厚いベニヤ板を出して「こんなものが役立つよ」とか、「こんなものが余っているから使わない?」とか書いた紙を張り出すようにしたら、お互いにないものをスムーズに供給しあうことができました。

うちは、きれいな水の入ったポリタンクを外に出しておいたのですが、どこからか情報を聞いて、「うちのおばあちゃんが薬飲む水がないんですけど、いただいてもいいですか」とか言って来られるんです。煙やらで、のどがむせたりするとやっぱり水が欲しくなるでしょ、みなさん寄ってきて、最後は犬までできましたよ。

私は、引っ越してきて1年2カ月ぐらいで、近所とは顔見知りになっていましたが、もうちょっと広い範囲に住む、初めて家の名前も知った人たちと一緒に力を合わせることができて、とてもうれしかったです。



残る火見ながら「これはアカン」

気を取り直して向かった消防署に支援のレスキュー隊

（神戸市 70代 男性）

自治会長だったので、地震が起きたその日は、とにかく火元を確認して、あとは埋もれている人をいっときも早く引っ張り出すということだけで頭がいっぱいでした。

翌日の朝4時ごろになって、一人で近所の公園まで来たんです。で、周りを見たらまだいっぱいプスプスプスと、火が燃えているんですよ。まだ焼けぼっくいが残って、燃えていたんです。

夜が明けない真っ暗闇の中で、一人でそれをじっと見ていたらね、ほんまもう、「これはアカン」という思いがしましたよ。

ですけど、しばらく見ていて、「沈み込んでいてもしょうがない。こうしていても始まらない」と気をとりなおし、町内の若い人たちと一緒に、埋もれている人を何とかしようと、近くの消防署に頼みに行ったら、ちょうど大阪のレスキュー隊が到着したところでした。

そこで、すぐうちの町内に来てもらうことができたのです。



駅前にワゴン車持ち出し町内の対策本部

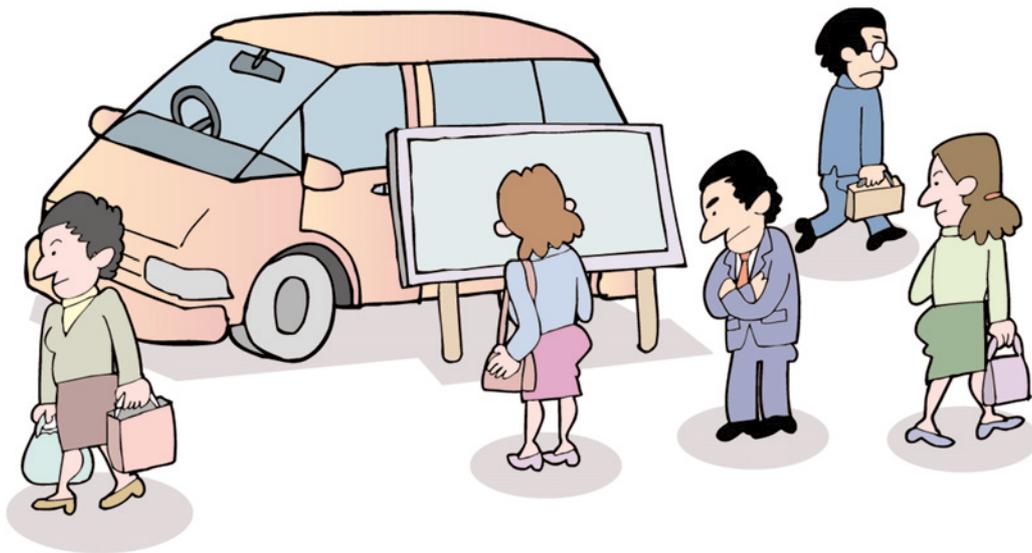
有効だったホワイトボード

（神戸市 70代 男性）

地震の日の夕方、駅前に行くと、「自治会長、ここ、対策本部にします」と言われて、びっくり。見ると、「震災復興対策本部」とダンボールに書いたワゴン車が停めてありました。近くの商店街の果物屋さんのワゴン車でした。

地域の若いもんが、地元のFMラジオから安否情報や被害情報などがどんどん入ってくることに目をつけて、車を対策本部にしようと思いついたようです。「対策本部なんて、神戸市よりも早いんじゃないか」って話したことを覚えています。

それから、仲間のひとりが、「これ、使ってくれ」と言って、商売道具のホワイトボードを3枚持ってきてくれたんですよ。それを我々の対策本部のワゴン車のすぐ近くと駅のまわりに置いたら、通りがかりの皆さんが、連絡先などを書いていくので、あっという間に埋まりました。あれはほんとうに有効でしたね。



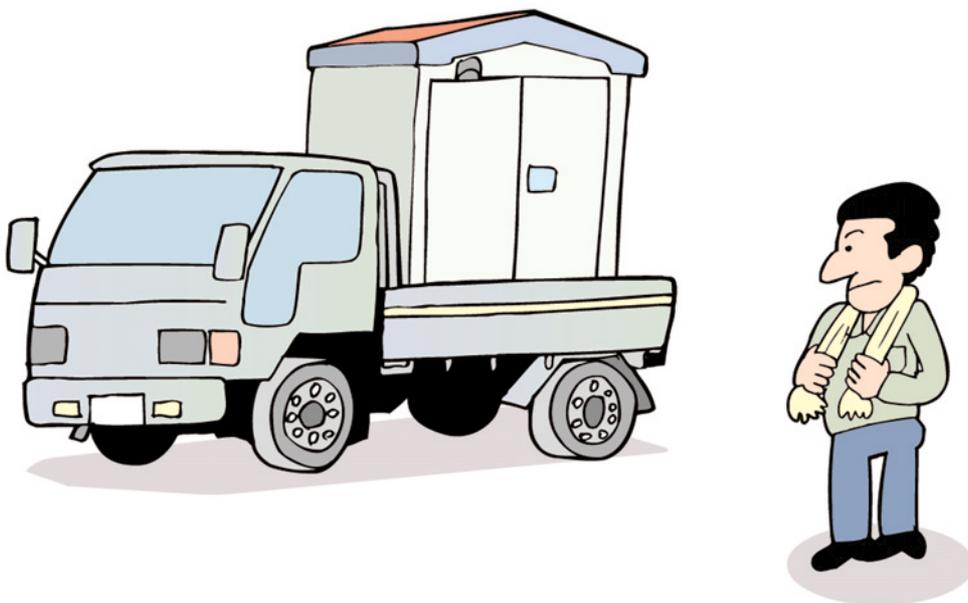
建設業の父、広島から被災地へバスユニット

（神戸市 20代 男性）

阪神大震災当時、小学生だった僕が住んでいたのは広島県の岡山県県境に近いところでした。あの日は、震度3とされたのですが結構揺れたので、飛び起きて、そんな大きな地震は初めて体験したので目がさえて、その後じっとNHKのテレビをこたつで見っていたことを覚えています。

地震から2週間後、親が建設業をやっていた関係で、バスユニットを救援物資として運ぶことになりました。あとで親から聞いたのですが、1.5トントラックの荷台に積んでいったところ、鉄道の高架をくぐる際に引っかかってしまい、タイヤの空気を抜いて車体をちょっとだけ低くして通ったそうです。そして、そこを抜けたら、一面の焼け野原だったとも。

「もうとにかく大変なことになっているよ」というのをずっと聞かされていたし、一生懸命人のために働いている親の姿を見ていたので、小学生のぼくにも、防災とかボランティアというのがいかに大切かということが理解できたのです。



閉じ込められた愛犬に救いの手

（淡路市 60代 女性）

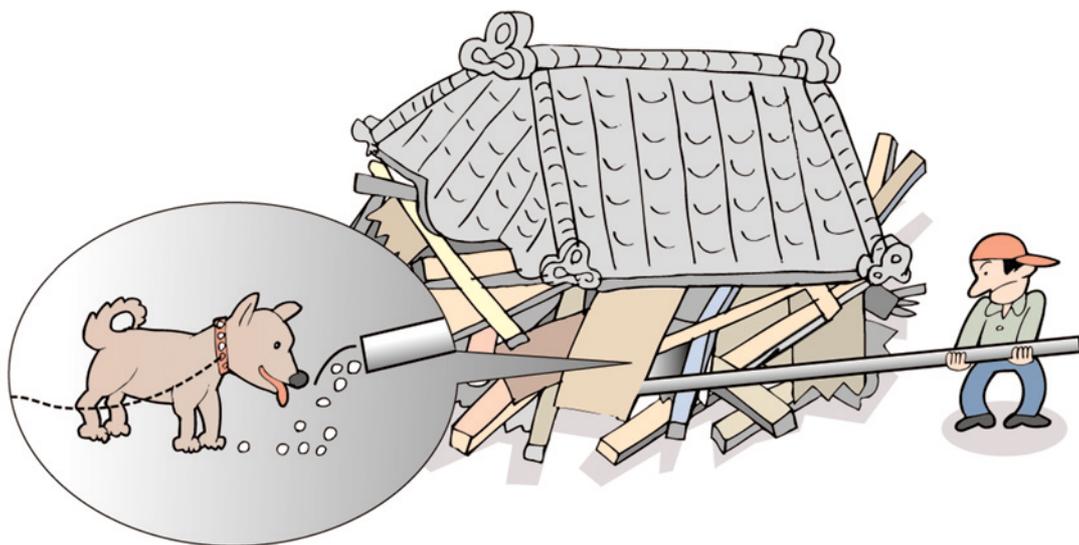
地震が起きて3日目までは、私はちょっとおかしかったみたいです。後から聞いた話ですが、みんなが話しかけても、「家が、家が」と言いながらで、犬のことはばかり心配していたそうです。

愛犬のナナは、将棋台のおかげで助かりました。けれど、くくられているから出てこられなかったのです。鳴き声が聞こえたような気がして、気になっていたのだけれど、死んどったらかわいそうやし、けがしていたらかわいそうやと思って、見に行くことができないままでいました。

2日後に見に行ったら、新聞社の人々が、すきまからトイを差し込んで、それにえさを流し込んでくれていました。若いお兄ちゃん、「これ、おばちゃんこの犬か?」と言うから、「そうです」と。

「これが鳴きよるけど、よう助けられんねん。鎖がついとるから」と言ってね、水とえさをやってくれていました。有り難かったです。

3日目、勤めていた保育園から職員が迎えに来て、職場に行ったら変だった調子がパッと戻って、園児たちの安否と送迎方法の確認などをこなせました。



避難所に電気マット持ち込み、何度も落ちたブレーカー

（淡路市 50代 男性）

冬の寒い時期だったから、避難所になった町民センターも底冷えがしていました。床が冷たいので、みんな新聞を敷いて、その上に毛布を重ねて敷いとったけど、「冷たい、冷たい」って口々に言っていましたね。

そのうち、救援物資の入っていた段ボールの空き箱を敷く人も出ました。それでも寒いので、家から電気マットを持ってくる人もあられました。

電気は通じていたから、みんなもマネして電気マットを持ってきてね。「落ちるよ、落ちるよ」と言っても聞かないから、よく、電気のブレーカーが落ちて、町民センターが真っ暗になりました。

地震のショックもあって、あの時の寒さはこたえましたね。



大学の授業再開に違和感

父の手伝いで被災地支援

（京都府 30代 男性）

地震当日の朝、大阪の郊外にある大学に電話をしたら、3限目から授業をするというのでテストを受けるために京都から車で向かいました。途中で、ラジオのニュースが、どんどんふくれあがる神戸の被災者の数を刻々と伝えていました。大学に着くと、校舎の窓ガラスがめっちゃめっちゃに割れていて、休講になりました。

数日たって、授業が再開された日の最初の講義で教授が、「大変な地震でしたね。では授業を始めます」というから、「教授、ちょっと待ってください。たくさん地震で亡くなられた方もいるので、授業を始める前に、みんなで犠牲者に対して黙とうすべきではないでしょうか」と提案したら、「それは個々人がやることです」と言われてガッカリしたのを覚えています。

その後、酒造組合の理事をしていた父親が、被災地の労災病院の人工透析用の水が足りないという話を聞いて、酒造りに使う水を4トンのタンクローリー10台で送るという救援態勢を指揮することになり、せがれの僕がその段取りをまかされたのです。

それまで、頑固一徹な父と対等に話をすることもできなかった僕ですが、あの時は夜中までかかって、父親と2人でああでもない、こうでもないをやったのを覚えています。震災をきっかけに、僕とおやじの距離が少し縮まったような気がしました。



商店街の再開、翌日に話し合い

行政に働きかけ12軒で仮店舗

（淡路市 50代 男性）

地元では、当日のお昼までには、遠くへ出かけていた一人を除いて全員の安否が分かっていました。

夜になって、避難所になっている町民センターで、観光協会の会長が「ここで避難しても一緒や。プレハブの小さいのを買って、裏でラーメン屋せえ。そうでないと寂しい」と言われました。1軒だけしたら悪いと思って、飲食組合のメンバーに話したら、私らもやりたい、オレもやりたいということになったんです。

翌日から町に掛け合いに行き、水道の設置料を無料にしてくれとか、電気工事を町で何とかしてくれとか、いろいろ働きかけました。

普通のプレハブだけなら早かったんですが、テント張って5軒つなげば県の補助があるというので、町の土地と旅館の跡地に5軒と7軒の計12軒の仮設店舗街を作ることにして毎晩話し合い、4カ月で作りました。出来たときには、ぎょうさんが来てくれて、テレビも取材に来て、満員やったですね。



出勤か、救助か、悩む

誰かがジャッキ、12人助ける

（神戸市 60代 男性 元市職員）

私の家はつぶれなかったけれども、周りはほとんどつぶれました。立場を考え、出勤すべきか迷ったあげく、その日は夜まで救助活動を続け、12人助けました。

家の下敷きになった人を助けたのですが、その助け方が難しいんですよ。上からいったら人の重みがかかって危険なので、下からもぐり込んで助けるんです。木造の建物などは、梁にジャッキをかませたりしてね。

最初、大きなジャッキでやろうとしたけど、重たくて扱えない。そのうち、近所の誰かが小さいジャッキを持ってきてくれたので、それを使って、ちょっとずつ持ち上げていきました。車のジャッキも使いましたが安定が悪くて、案外使いづらかったんです。

で、頭が入るぐらいの大きさまでになったら、そこからもぐっていくのですが、余震があるから、これがかなり怖いんです。私は田舎の百姓の育ちだったから、できたけど、町の人には難しいやろうね。



パジャマに作業着で部下出勤

思わず注意し、被災度の違い知る

（神戸市 60代 男性 元市職員）

当時、役所の職員は、自分の家がつぶれたとかというようなことは、あまり言わなかったですね。市民が大変な状況でしたので、自分のことなど言い出せなかったのだと思います。

ある日、部下の職員がパジャマの上に作業着を着て、長靴をはいてずっと役所に泊まっていることに気づき、「おまえ、家に帰れや」言うたんです。

すると、「実は、家がつぶれてしまって」という返事。「お母さんを親類に預けて、パジャマのまま役所に出てきました。だから、帰るところがないんです」ということでね。

地震後すでに1週間ぐらい経ったころでしたね。私の家はかろうじて倒れなかったものですから、冬の時期に、パジャマに作業着ではさぞかし寒かったろうと思いますが、すぐには気づいてあげられませんでした。



母の防災意識で命助かる

つぶれた庁舎見て震災の激しさ初めて自覚

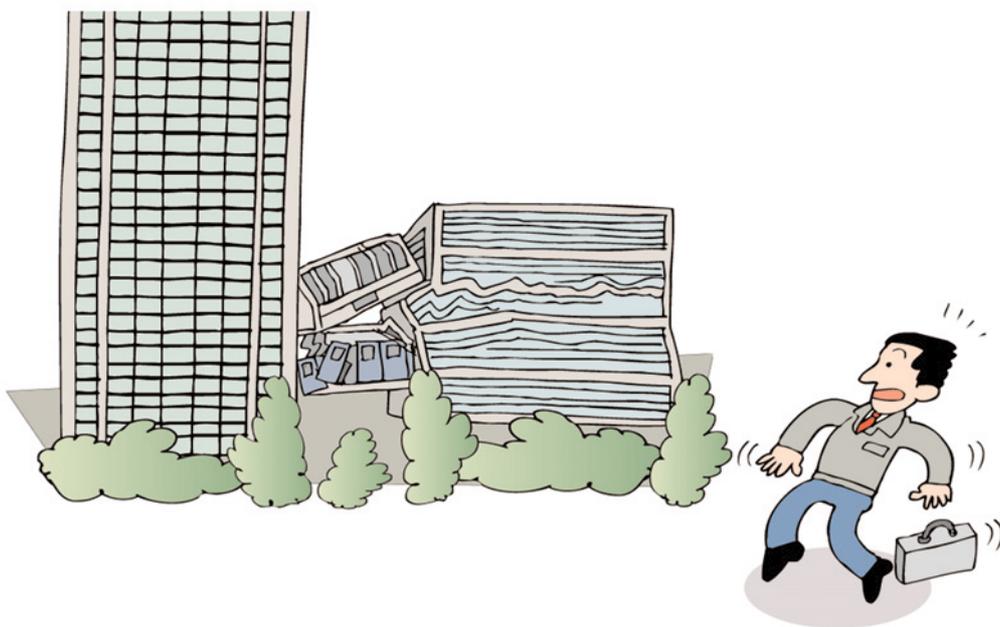
（神戸市 40代 男性 市職員）

うちの母親が東京出身でして、地震については、かなり問題意識が強かったんです。で、枕もとには、地震が起きたときに落ちてくるような物は絶対に置かないということを徹底してまして、そのおかげで僕の部屋は、観音開きのタンスがガーンと開いて、中の物が落ちてきたり、倒れかかったタンスが蛍光灯の傘に当たって止まったりということはありませんでしたが、寝ていたところは大丈夫でした。

母親のほうも、細長いロッカーみたいな洋服ダンスを持っていましたが、ベッドと平行に置いていたので、頭の上に倒れるのではなく、ベッドと平行にバタンと倒れたので、命拾いをしました。

僕の家は、マンションの5階で、町中を見下ろせるところにあります。窓をパッと開けると、火の手が4本か5本ぐらい上がっていました。さらに1時間ぐらいすると、僕の家近くから火の手が上がるようになり、正直びくびくしていたんですが、やっぱり仕事場が気になって、病気で寝込んでいた母を振り切って、職場に向かいました。

今から思うと恥ずかしい話なんですけど、出勤しようと思ったときにはまだ本気で地震の被害を自覚していなかったんですよ。市役所の2号館がつぶれているのを見たときに初めて、「これはただ事ではない」と思いましたね。



大学や自治体からの無茶な資料請求に困惑

（神戸市 50代 男性 市職員）

マスコミは、テレビでいろいろ報道してくれたけれど、いいところだけつまみ食いしているんじゃないかという不満がありました。もっと、真相を伝えてほしいという気持ちですね。また、入れ替わり立ち替わり同じ質問をしてくるのにも参りました。もう少し現場の状況に配慮してほしかったと思います。

それから、いろいろな研究機関が調査団としてやってきて、次から次へと資料を請求するんですよ。多分、自分たちの研究材料にするんだと思いますけれども、古い住宅地図が余っているだろうから全部くれなんて平気で言う人もおりました。大学の先生も、ちょこちょこ現場に来てアンケートをして、ぱっと本を書いてね。その本を読ませてもらいましたが、本当のことは伝わっていないんじゃないかと思いましたね。

ある自治体は、何ページにもわたるようなりストを送りつけて、「段ボールの箱に入れて送ってくれ」と。こちらのマンパワーにも限りがありますので、本当に困りました。



出向中で行き場なし

自分で職場探してイザ出勤

（神戸市 50代 男性 市職員）

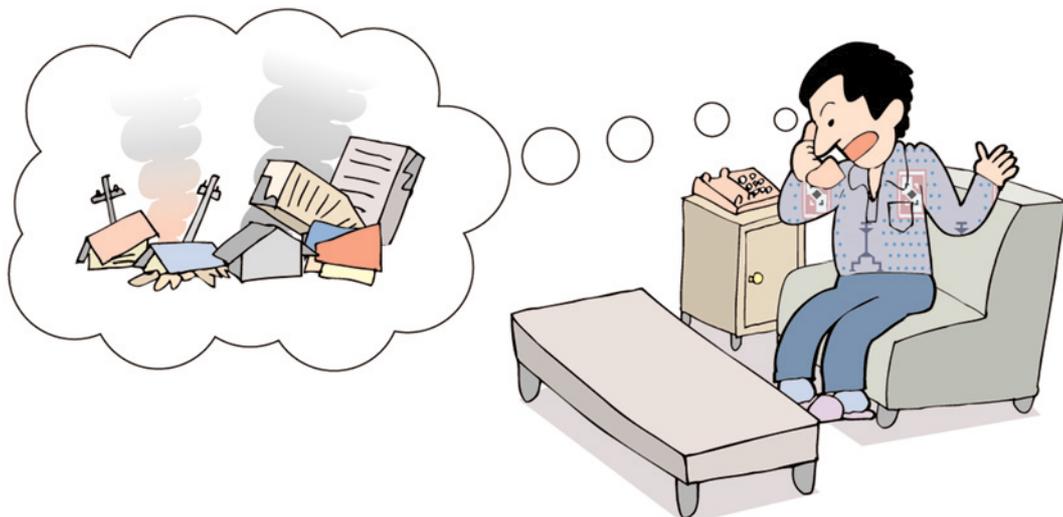
夢うつつの中で地震が揺れ出し、すごい揺れだったのでタンスが倒れないように両手で支えながら、揺れがおさまるのを待ちました。ドアを開けて、隣に寝ている子どもの無事を確認したところで、テレビをつけました。でも、映ったのは瞬間で、すぐに停電になってしまったので、全国放送のラジオをずっと聞いていましたが、何が起きているのか、全然はっきりしないのです。

うちは郊外でしたので、「ここでこうやから、もし三宮のほうに揺れのもとがあったらえらいことになっているな」と思い、みんなが出勤する時間に職場に電話をしました。当時僕は大阪にある外郭団体に出勤していましたから、直感的に、「僕を必要としているところに行かなければ」と思ったんです。

もともとは港湾部局出身なので、そこに電話をしてみるとかなり人が出てきていました。

「それなら」と、出向元になっている企画部局に電話したら人がほとんど出てきていなかったので、「ここやったら僕の仕事はあるかな」と思って、そこを手伝おうと出て行ったんです。

企画部局で全体を見て仕事をしたことが、人生の分かれ道だったのかなと思います。そうでなければ、神戸の防災・減災に深く関わっている今の自分はなかったんじゃないかなと。



のんびり聞こえた「避難勧告」

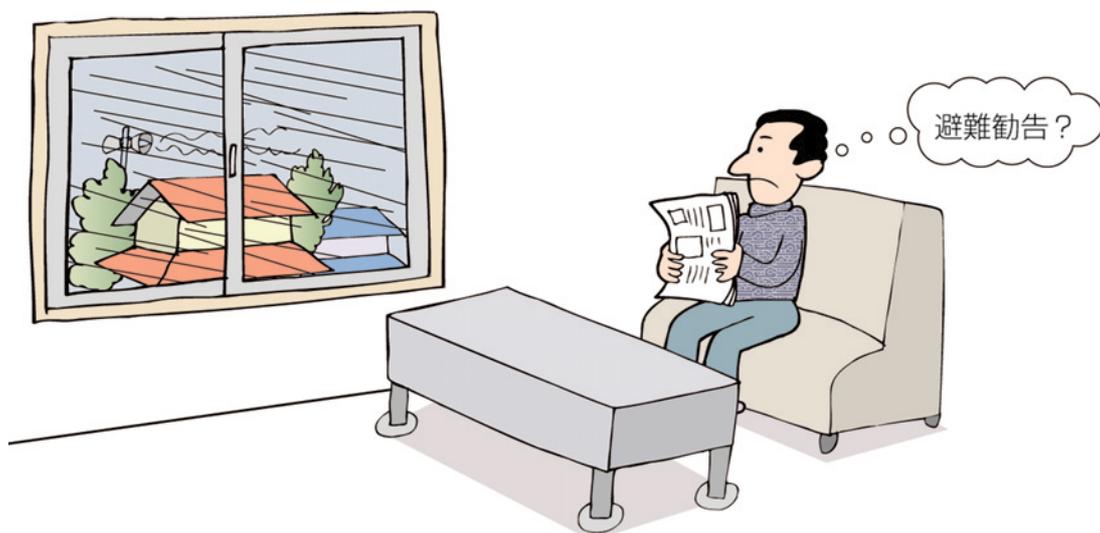
緊迫感なかった防災無線

（豊岡市 50代 男性）

夜になって防災無線が入ったんですが、何とものんびりした感じなんですよね。おとしよりのためにゆっくりしゃべるということもあったのかもしれませんが、何だか避難命令という緊急性とはかけ離れているように思いました。

もう家の玄関のところに水が来てしまっているのに、「避難勧告が出ました」とペラッと緊迫感のない声で言っているだけなんです。もう少し大きい声で、大変な状況になっているということが伝わってくるような調子で言ってもらえば良いのにと思いました。

情報の伝達にもスピード感がほしいですね。昔は地区の消防団などを介して、近くの川の水位が今どのくらいになっているというような情報が、すぐに家々に伝わって来たものです。防災無線のリアリティーのなさもそうですが、もうちょっと地域の情報がすぐに伝わる仕組みが必要ですね。



急きょ地元に避難所開設

訓練どおりに事は運ばず

（豊岡市 60代 男性）

午後4時半ごろでしたか、地区のほうから、県の銘木になっている神社の柳の木が折れて通学路を塞いでいるという電話をもらって、すぐ会社から戻りました。

で、区の人たちと、どうやってその木を撤去しようかと相談しているうちに、雨がはげしく降ってきました。それでも、過去20年、同じようなことがあっても地区のところまでは水が来なかったという気持ちがみんなの中にもありました。

夜の7時ごろになって、防災無線で、避難所に指定されている高校に避難するよという連絡が入りましたが、地区の若い奥さんから「小さな子どもを連れて遠くの高校までいけません」と電話がかかってきたので、急きょ、地区の会館を避難所にしようということに決めました。

ひとり暮らしのおとしよりとかもいますし、そのころ膝ぐらいまで水が来ていましたので、早めに避難するように呼びかけました。結局、会館には100人ぐらいが集まりました。

実は、被災した年の5月に県の防災訓練があって、私を含めて区から15名が参加していたんです。それと全く同じことをやったという感じですが、実際にやってみると、いろいろ大変で、訓練どおりには行かなかったです。



コウノトリとの共生に新たな希望

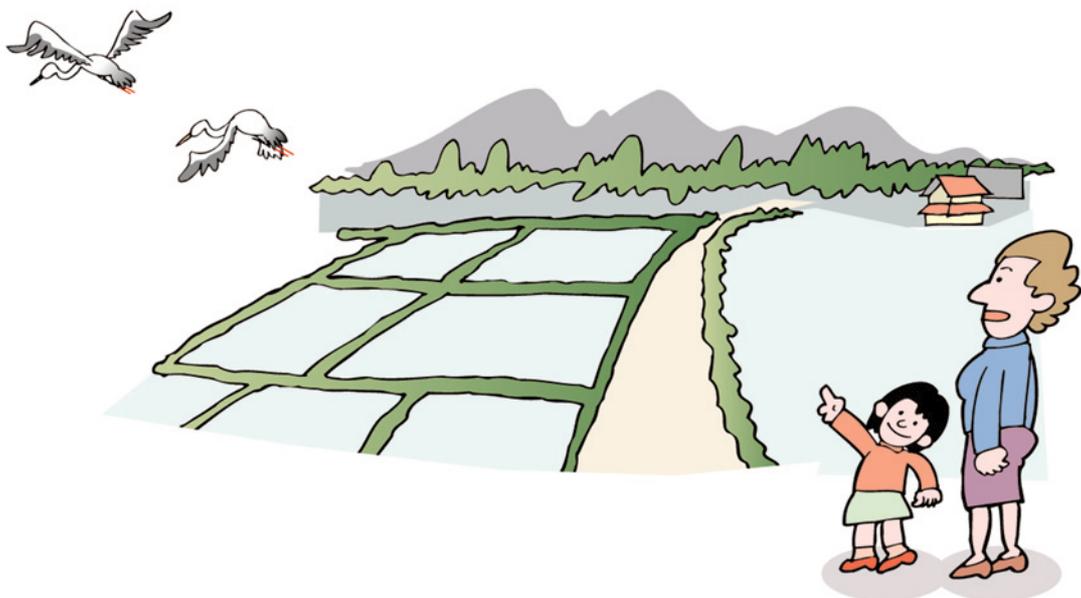
（豊岡市 40代 女性）

川の堤防が切れて田んぼが水に浸かってしまって以降、今まで見られなかった雑草が生えるようになったんです。種が流れてきたのだと思いますが、除草剤とか使ってもなくならないのです。

ここの田んぼはちょうどコウノトリの拠点地にもなっていて、コウノトリが舞い降りて、毎日と言っていいほどその姿が見られる場所なんですよ。それを見に、たくさんの人たちが見物にやってきます。ただ、そのために強い除草剤や効く農薬が振れないというジレンマ*はありました。コウノトリのために、あれを使ったらいかん、これを使ったらいかんと言われてね。

でも、今は抑草という考え方が主流になりつつあります。ぬかやらを使って除草剤を使わずに草を抑えていくという農法も、みんなが一緒だったらがんばっていけると思うようになりました。なれていくまではやっぱり時間も労力も、いろいろな面で大変ではあるけれど、やっぱり飛んでいるコウノトリを見ていると雄大で、「わあ、すごいな」と思うんです。

*ジレンマとは、2つの相反したことがらの板ばさみになってどちらとも決められず進退きわまること。



会社の前のパレット見あたらず

倉庫の中はグシャグシャ

（豊岡市 50代 男性）

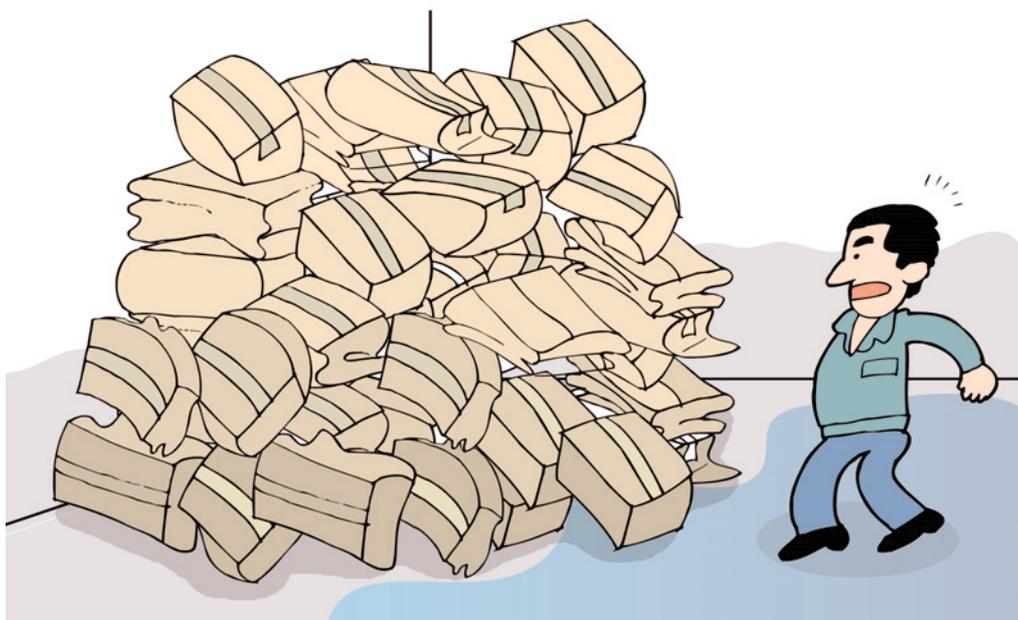
雨もかなり強くなってきたということで、社員を早めに帰し、自分も午後6時ぐらいには自宅に帰りました。帰った時点では何ら問題はなかったんです。

ところが、ものの10分もしたら、家の前に水がドードーと流れてきたんですよ。急いで情報をかき集めると、古い橋が流されて、それが橋に引っかかって、ダムみたいになってそこから水があふれ出したということでした。

30分ぐらいで、もう膝の高さぐらいまで水が来ました。車を高いところに移動させ、いざ家族で避難しようとしたときには、ものすごいスピードで水が流れてくるので、家の真向かいにある避難所の小学校まで行けなくなってしまったんです。

翌日、会社のほうが心配になって朝早めに家を出ました。会社に着くと、玄関前に積んでおいたパレット*が見あたらない。カギをあけて中に入ると、60センチぐらいのところまで水が来たような跡がありました。それから、生地とか、製品を入れる倉庫がちょっと低くなっているの、気になって見に行くと、もうグシャグシャでした。積み上げていたダンボールが水を吸って、すべて倒れてしまっているという状態だね。すぐに従業員を集めようにも電話が不通になっていて、手をこまねいているだけでした。

*パレットとは、輸送や物流などに使う、荷物を載せる台になるすのこ。



洪水翌日、「とにかく負けるな」と社員にメール

（豊岡市 50代 男性）

翌日、会社に行ってみると、8棟ある会社の建物がすべて床上浸水で、最も深いところで床上78センチ、ちょうどミシンのテーブルまで浸かっておりまして、水が引いた室内はどこも泥をかぶった状態でした。

洪水の晩は社員といろいろ連絡をとりあっていたので、携帯電話の電池も切れてしまいました。社員の安否のことが気になっていましたが、社内の緊急連絡網があるのですが、停電で電話が使えませんでした。

同級生のガソリンスタンドに電気がついていたので、そこで充電をさせてもらいながら、社員にメールを打ちました。「とにかく負けるな」と。

メールのアドレスが分かっている社員全員に、明日の朝から工場をやること、長靴をはいてくること、現在の状況を知らせてくれということ、連絡先がわかっている人全員に伝えてくれるよう頼みました。そして私は、この先どうやってやろうかと、一晩中考えていました。

次の日、200名いる社員のうち80名弱が出てきてくれました。みんなで掃除をして、白い床が見えたときには、涙がでました。



製品はすべて産業廃棄物

10トン車で6回捨てて作業再開

（豊岡市 50代 男性）

水に浸かった製品は売り物になりませんから、もうすべて産業廃棄物*になってしまいました。被災している社員も多く、道路が冠水でところどころ通れない状況になっていて、集まりにくい状況でしたが、あくる日には社員8名全員が集まってくれました。

会社が操業する前に、まず片づけをしなきゃいけない。片づけるということは、すなわち捨てるということなんですね。製品をすべて捨ててしまわなきゃいけないという非情さを味わいました。

水害に備えるには、製品を事前に他の場所に移すことが良いと思いますが、スペースの問題があってなかなか難しいものがあります。実際、前の日に一部の製品を高いところに上げるように指示はしていたのですが、ごくごく一部でした。ただ、マシンとかの生産設備やコンピューター関係が無事だったことは不幸中の幸いでした。

指定された廃棄場所まで、少なくとも10トン車で6回は捨てに行きましたね。結局、操業まで約2週間かかりましたが、取引先なども手伝いに来てくれて、人の温かみというか、親切さを、つくづくありがたいなと思いました。

*産業廃棄物とは、産業活動の結果、排出されてくる廃棄物のこと。



日が暮れるまで商品廃棄

助かったボランティア支援

（豊岡市 50代 男性）

来る日も来る日も工場の後かたづけに追われていました。もともと私を含めて15人ぐらいの会社なのですが、自宅が床上浸水になった社員も数名いました。当然、そういう人に「会社に出てきてくれ」というのは無理な話なので、残った者たちで、とにかくやらなきゃいけないということでやっていました。

3日目ぐらいですかね。神戸や大阪から10名ぐらいのボランティアの方がたくさん来てくださって、数日間、てきぱきと作業を手伝っていただきました。

「このままじゃ、ヘタをすると10日じゃ済まないぞ」と思っていたところへ、豊岡市の方から「困ったことがあれば、どんなことでも言ってください」と声をかけていただいたので、甘えさせてもらったのです。ボランティアの支援は、非常にありがたかったです。



データの復旧がクリスマスプレゼント

水害から2カ月で

（豊岡市 50代 男性）

1階はすべてだめになっていましたから、とりあえず、先に出荷できそうなものだけを分別して、あとは順番に捨てて、その後にミシンなどの機械類を購入しました。それから、工場が水に浸かっていますから、後でカビが出るのが心配で、すべて室内の塗装をやり直しました。そんなこんなで、1カ月ぐらい、全然作業していませんでした。

お客様には、納期がこういう事情でおくれますということをお伝えしました。待っていただけない場合はキャンセルしていただくということでしたが、8割方は待っていただけて、ありがたいことだなと思っていました。

一番の被害は、パソコンです。すぐにハードディスクを引っ張り出して保管していたんですけども、日本ではデータがとれないということで、結局、それをアメリカに送りました。それが帰ってきたのが水害から2カ月後の12月25日。まるでクリスマスプレゼントみたいで、それをもって全面復旧ということで、翌年の1月5日からスタートしたという形です。

あれ以来、会社の2階と、私の自宅と2カ所でデータをバックアップしています。



水没のコンバインまで保険でカバー

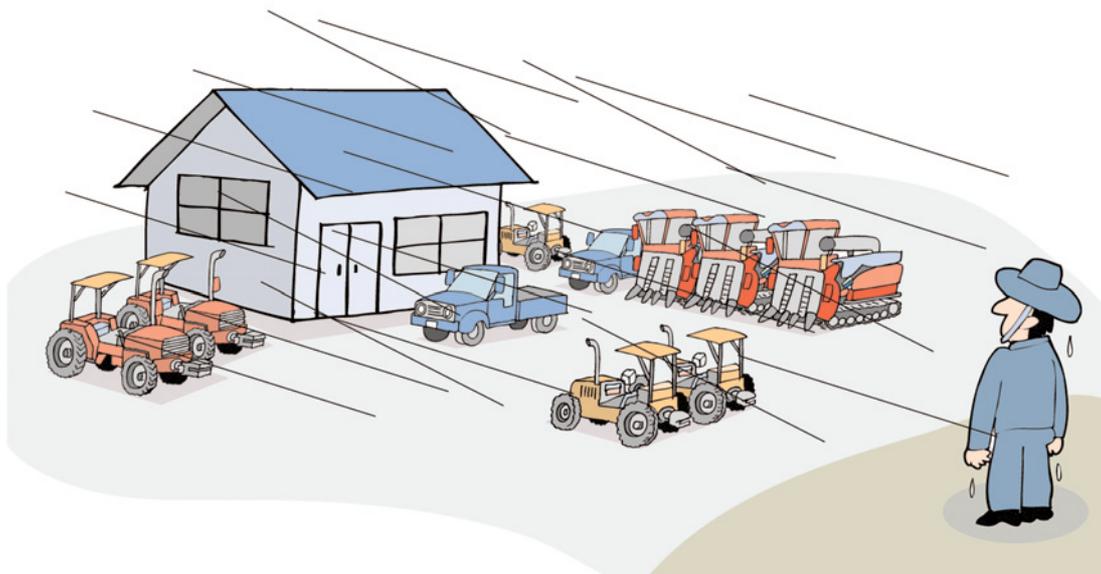
（豊岡市 70代 男性）

そのあたりは昔からよく水がつくところと承知していましたが、うちの事務所は、田んぼから4メートルぐらい高い位置に建てていました。すぐ横に流れている川の堤防よりも高いので、堤防が切れても大丈夫だと思っていたのです。

けれど、夜の9時ごろになってますます雨と風が強くなり、心配になって会社のようすを見に出かけました。その頃には、円山川本流につながる川の水が、下流側から上流にもものすごい勢いで逆流していて、まるで津波のように立ち上がっていたのです。さすがに、「これはちょっとおかしいな」と。

はっきり覚えてはいませんが、堤防が切れたのは10時半ごろだったと思います。それからは考えられないほどの速さで水が押し寄せてきました。会社には、トラクターとか、2トン車とか、軽トラックとかが、いっぱい置いてあったんですわ。それも5台や6台じゃないんですよ。

ただ、運の良いことに、その年の4月に、保険を火災保険から総合保険に全部切りかえていたんですよ。農協さんから「新しい保険が出たから、どう？」って言われてね。すぐにはそのことに気がつかなかったぐらい混乱していましたが、水没したコンバインなんかもすべて保険でカバーできて、ほんとうに助かりました。



しなかった台風前の畳上げ

ポンプ場でき、備えおこたる

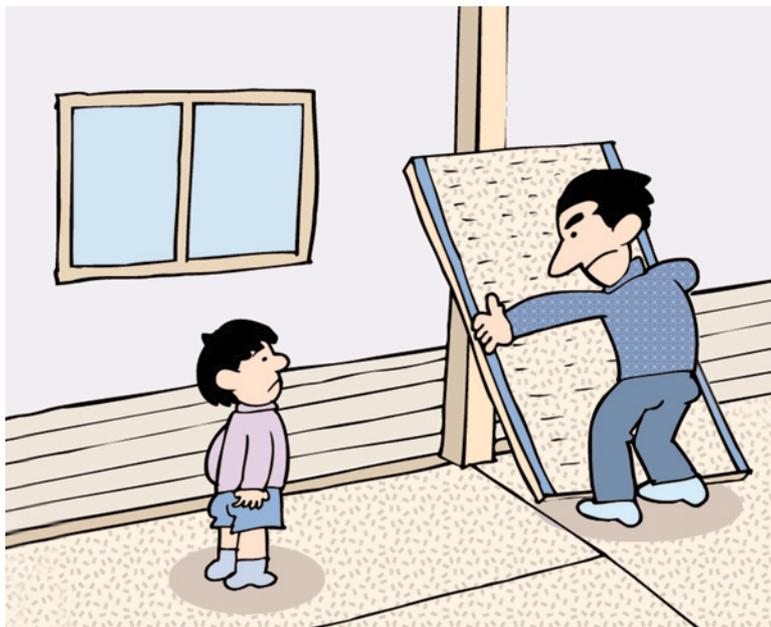
（宮崎市 60代 男性）

我々は子どものころから、台風がきたら何をしなくちゃいけないかというのは、分かっていたんです。この土地はまわりに比べて低いから、「雨が降ったら大変だな」という思いは、自然と体の中にしみついていた。

昔は、農業をしている家は、だいたい食料の米や麦などを床下に置いていて、どこの家も台風がくるとなったら、そういうものを家の中に移動して、畳はぬれないように柱に立てかける、いわば「畳上げ」をしたものです。そういう準備に必要な角材や丈夫なヒモなどは、私の家にもありました。

けれども、10年ぐらい前に、ここに雨水ポンプ場という排水施設ができてからは、「もう水は上がらないよ」という雰囲気になっていたんです。ところが今回は、「未曾有*の雨」だから、どうにもならなかったんですね。私も、水が出そうかなんて、いっさい気にしていませんでした。ちょっと油断があったのかなと反省しています。

*未曾有（みぞう）とは、昔から今までに、まだ一度もないこと。



保険は絶対必要

見積り中で、間に合わず

（宮崎市 60代 男性）

定年になって40年ぶりにふるさとに帰って、家を新築したのはいいけれど、たった9カ月でこの水害にあい、泥水につかった家は、新しくそろえた家財道具もろとも、使いものにならなくなりました。

家を建てるときは、この土地は昔から水害が多いということで、1メートル50センチぐらいかさ上げをしました。「これだけ上げたら大丈夫」と思っていたのに、あれよあれよという間に水が押しよせてきて、それこそ、女房と2人で貴重品と毛布だけを持って逃げるだけで精いっぱいでした。

結局、床とか壁は全部とり替えましたから、老後の資金にと残しておいたお金の半分を使わなければならなくなりました。

私も長い間仕事をしてきて、保険の大切さは分かっていたんですよ。だから4社ぐらいから見積をとって、どれが有利かよく勉強して、年末までにどの保険に入るか決めようと思っていた矢先でした。「早く保険に入ってさえいれば」と落ち込みましたが、運がなかったからだ、と、あきらめました。



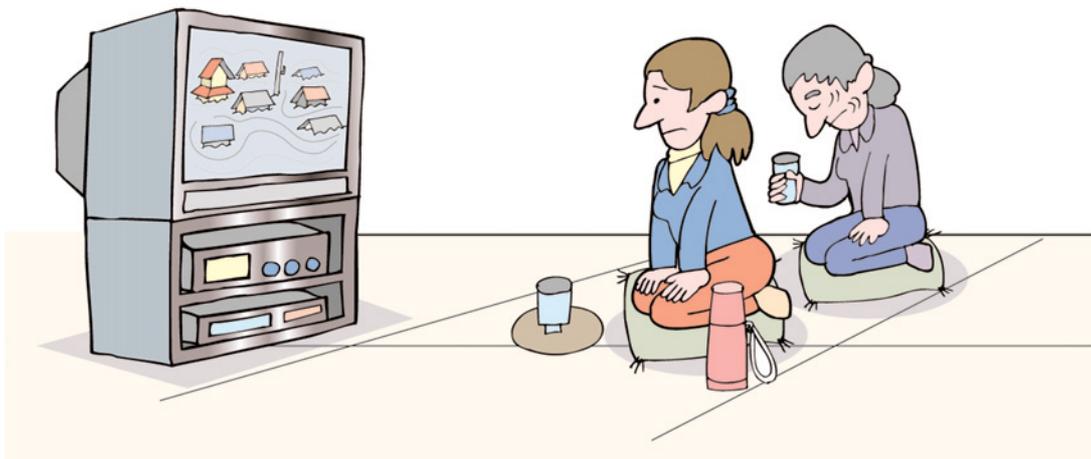
避難所のテレビで発見、泥水に浸かるわが家

（宮崎市 20代 女性）

私が住んでいたところは、今まで水に浸かったことがなかったので、水害に遭うということを全く想定していませんでした。朝の5時ごろに消防団の人たちが「避難してください」と言って回っていることに家族が気づいて、家族全員、布団から出て服を着替えて、すぐに避難を始めました。

避難所になっている小学校に行く途中では、橋を渡らなければなりません。うちは足腰の悪いおばあちゃんを連れていたので、傘もさせないようなすごい雨風の中を逃げること自体、怖かったです。

私はおばあちゃんが一緒だったので、小学校の畳の部屋で過ごさせてもらっていたのですが、その部屋のテレビでニュースを見てみると、川が氾濫して、あたり一面、海のようになった町のように流れました。その中に自分の家を見つけたときには、ショックで言葉もありませんでした。



子供の頃の写真も、卒業写真もなくなった

（宮崎市 20代 女性）

父親が大事にとっていた写真とか、ビデオが全部やられちゃって、それを片づける父親の姿を見るのが辛かったですね。

私の家は平屋なので、全て水につかってしまいました。だから、私の卒業写真とか成人式の写真とかも今はもうありません。泥水をかぶった写真は、表面がペラペラっとはがれてしまって、どうにもならない状態になってしまいました。

やっぱり、みんな、最初は生活の場をつくるための片づけで手一杯なんですよね。ちょっと落ち着いてアルバムの整理をしようとするときには、紙が水をたっぷりすってしまっているから、どうしても手遅れになってしまうんです。

私が一番残念なのは、幼いころの写真がなくなってしまったことです。 「結婚式の自己紹介に使える写真がないのは困るな」なんて、冗談めかして言っていますが。



水害の後始末に3カ月

（宮崎市 20代 女性）

うちは平屋でフローリングの部屋が3つあって、あとは全部畳だったので、まずは畳を張りかえてからということで、水害後1カ月ぐらいは親戚のところやりに住んでいたのですが、おばあちゃんは認知症ぎみでしたし、「やっぱり家がいいね」という話になりました。

まずはおばあちゃんの部屋を住めるようにし、その次に、そこでみんなが寝られるようにフローリングの部屋を1つきれいにして、というように、徐々になおしていきました。

年末にやっとすべて終わったという感じになりましたが、完全に元の生活に戻るまでに3カ月以上かかりましたね。

ピアノはもちろん、タンスとかも、家にあるものほとんどすべてダメになりました。ただ、不思議と冷蔵庫とエアコンは生きていました。塩水でなければ、電気製品は自然に乾かせば使えるものもあるようですね。避難するときに電気のブレーカーを下ろしておけば、少しでも被害を軽くできるんじゃないかなと思います。



おとなりさんがいない！

腰まで浸かっておとしよりの救出

（宮崎市 60代 男性）

夜になって、民生委員さんがおとなりに住んでいる人が来ていないことに気がつき、「こりゃ、大変だ」ということになりました。あの頃は自治会でも、安否をチェックする役目の人なんて決めていなかったものですから。

で、市役所の方がおられたから、こういう人がまだ来ていないので、今から迎えに行きたいんですと言うたら、「もう今日は遅いから明日にしてください」と言われました。

でも、いてもたってもいられず、1人じゃ危ないからと、仲間と2人で様子を見に行きました。堤防ぞいに歩いて、その家にたどり着き、戸をたたくと、むこうから声がしたんです。「おい、中にいるぞ！」ということですね。

こちら腰まで水につかっている状況だから、水圧でドアが開かないんですよ。ようやくドアをたたき壊すと、家の中の物がこっちにブワーッと流れ出てきました。

85歳と83歳の老夫婦でしたから、二人とも部屋の中で、立ったまま、声も出さずに震えておられました。助けることができ、ほんとうに良かったなと思いました。



真夜中に必死で伝えた避難指示

（宮崎市 20代 女性）

あの日は、両親と私の3人でいたんですけど、台風がどんどんひどくなっているということで、父はとりあえず畳だけ上げて、職場のようすを見に1人で出かけて行ったんです。母親も一応貴重品だけは整えていたんですけど、ちょっと疲れているようだったので、「私がいるから寝ていていいよ」と言って、先に休んでもらいました。

私は、居間でテレビを見ていました。外で消防車か何かが、何か言ってまわっていることは聞こえていたんですけど、今イチ何を言っているのかよく分からなくてね。

そうこうしているうち、夜中に「避難指示」が出ていることが分かって、母と一緒にちょっと高台にある、おばさんの家に行くことに決めました。

で、私は、避難する前にご近所の方々に知らせなければと思い、何回もドンドンと玄関の戸をたたいて、何軒か起こしてまわりました。みんなあんまり真剣にテレビを見ていなかったらしく、ほとんどのお宅がもう寝ていたようでした。電話をかけて知らせたお宅もありましたが、「え、逃げるんですか？」っていう反応でした。

結局、床上まで水に浸かってしまったので、お知らせして良かったなと思いました。



命綱つけて濁流の中を泳いだ

おとしより救助も命がけ

（延岡市 30代 男性）

僕は社会福祉協議会の職員ですが、当時消防団員もやっていたので、救助活動のために現場に行きました。そこはほんとうにすごい展開になっていて、「役場からの命令じゃないと動かない」と言っていたおじいちゃん、おばあちゃんが家に取り残されている状況でした。

水の流れが速くて、ボートをこいだら自分たちが流されちゃうぐらいなんです。で、僕は泳ぎがかなり得意なものですから、命綱をつけ、ボートのロープをもって、濁流の中を泳いで助けに行きました。なんとか無事に泳ぎきりましたが、普通の人には、絶対にしてはいけないと思います。危険ですからね。

「とにかく乗りなさい」と言って、二人をボートに乗せました。おじいちゃん達は、とりあえず必要なものだけはビニール袋に入れていましたが、あとは着の身着のまま。雨が激しくて傘をさせるような状態ではなかったので、ずぶぬれになりながらボートの上で不安そうにしていました。

近所の人が避難するように言っても、かたくなに「もう、ここから動きたくない」という人がよくいますが、やっぱり避難は早めにしないとイケませんね。



泥まみれで後かたづけ

3日目のお風呂でホッとひと息

（延岡市 30代 男性）

当時、役場の天井ぐらまで水がきたんですよ。うちの事務所の駐車場に置いていた車も8台が廃車になりました。車の屋根まで水が入って、エンジンがやられてしまったから。

軽自動車などはプカプカ浮いてしまって、留めていたところから2メートルぐらい離れたところにあたり、ほんとうに見たこともない光景でした。

職場の中にも土砂が入り込んでいたので、仕方なく一日中泥出しをしました。断水で、泥まみれになっても手も洗えず、トイレへ行きたくともなかなか行けない状態のところへ、お昼すぎに山奥から井戸水を持ってきてくれた人が、「きれいな水だから、飲んでもいいよ」と言ってくれたときは、すごく嬉しかったですね。

やっぱり泥がついている状態のまま3日も過ぎると、自分がもう臭くてね。汗やら何やらがしみこんだような感じの臭いがして、困りました。

ようやく泥かきが一段落して、久しぶりに家に帰ると、たまたま湯船に残り湯があったんですよ。「やっと風呂に入れる！」とすごく嬉しかったのを覚えています。



山道の運転は命がけ

のんきな自分にあきれる

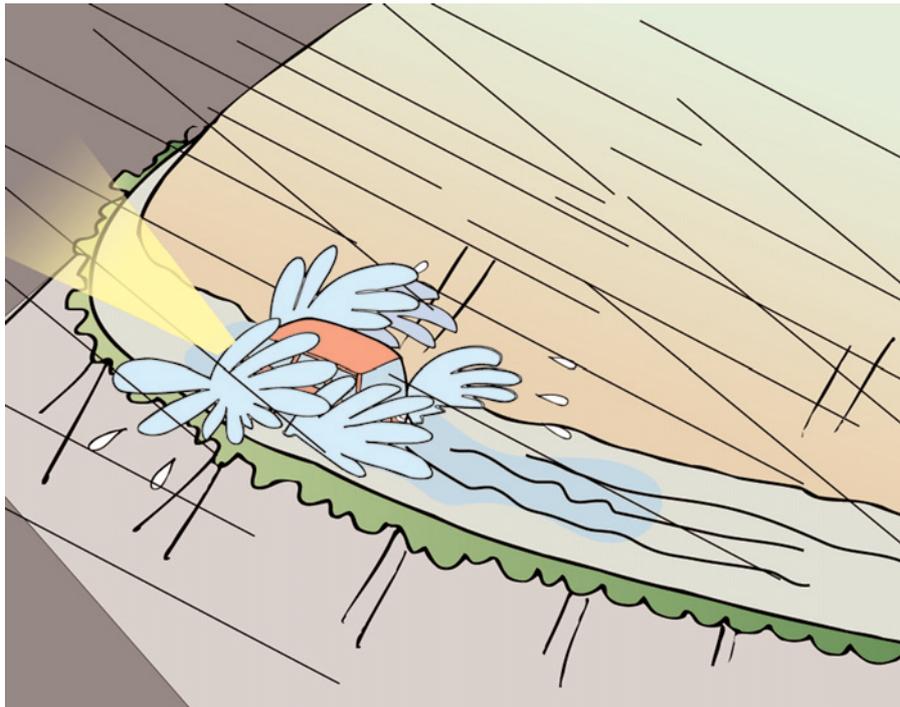
（下諏訪町 20代 男性）

学校の終業式の日、友達と羽目を外して、夜中の2時ごろに山道を運転して帰る途中であの豪雨にあいました。

途中の峠を越える時には、まるで遊園地のアトラクションみたいに、水たまりの上を走るたびに、ビシャッーっとものすごい水しぶきがあがるのです。最初のうちは、友達と「すげえー」なんて、おもしろがっていましたが、そのうちに、前が完全に見えなくなるぐらいの水しぶきが10秒間ぐらい続くので、笑い事ではなくなりました。

「これはおかしいぞ」と思いはじめましたが、山道で引き返すこともできず、スピードを落として走りましたが、正直、ちょっと怖かったです。いつもはトラックが多く通る道ですが、運良く対向車が来なかったから助かりました。

今思うと、無謀だったなと。気象情報をまったく気にすることもなく、のんきに夜の山道を車で行くなんてね。



立入禁止でも危機感なく

ズボンの裾まくり水の中を自宅へ

（諏訪市 30代 女性）

当日は、会社から帰って、水害で浸かったあたりで飲んでいました。会社から帰る時点で大雨だという連絡はあったんですが、飲みに行くころには普通だったので出かけていました。家に帰るときには、既に50センチくらい水が上がっていて、道路一面は海原のような状態でしたが、ズボンをめくって、わざわざその中を帰ったんです。帰る途中、マンホールの周りに「危ない」という標識が立っていたのはとても印象強く覚えています。その時点では水が透き通っていたから、そんなに危機感もなく帰りました。

考えてみると、家って人が絶対帰る場所なんですよ。今、携帯で当時の写真を見たら、立入禁止って書いてあるんですよ。でも、私はそれを越えて家に帰っているから、人ってどんなに家が危ないときでも、家に向かってしまう習性があると思うんです。危ないときには、家じゃないところに行くという習慣をつけておかないと、すごく怖いなと思いました。



長靴流され、泥の中を避難

（諏訪市 30代 女性）

私が住んでいたのは、ちょうど土砂災害があった地域です。土砂崩れがあったというので、家の外を見たら、車がプカプカ浮いていて、土砂が流れていました。それで、家のドアとか窓をあけないようにして、土砂が引くのをずっと待ちました。大体3時間くらいしたら水が引いて泥だけになってきたので、外に出て、避難所へいきました。泥の中を歩くので、「沈んでしまったらどうしよう、できるだけ自分を身軽にしなきゃ」と思って、何も持たずに避難しました。

避難するのに一番困ったのは長靴です。長靴はいつも家の外においてあったので、どこかに流されてしまい、必要な時に使えなかったんです。長靴は家の外じゃなくて、中に入れておけばよかったなと思いました。



車を高台に避難させ、自分はみぞにはまる

（諏訪市 30代 女性）

これは、私の上司の話ですが、上司の家も浸水していたそうなんですが、車を安全な高台に動かそうということで、持っていった帰りに、本人がみぞにはまってしまったらしいんです。180センチぐらいある背の高い方ですが、背伸びをしてやっと顔が出るぐらいの深さだったようで、本人も「おお、セーフ」と思って、水から上がってうちに帰ったそうなんです。

上司は、泥だらけになって奥さんに怒られたといっていました、流されていたら九死に一生レベルの話ですよ。

水がついたときには、引けるまでは出ないほうがいい。ふだん通っているところでも、危険な落とし穴がいっぱいあるので、必ず2メートルぐらいの棒を持って、探りながら歩かないといけませんね。



車の通行で二次災害

水圧でガラス割れ

（諏訪市 60代 女性）

水害のときには、ものめずらしさから見にくる人もいるんですが、4WDの車がありますよね、あれは水の中でもよく走れるものですから、すごい勢いで通って行くことがありました。ガラス戸が水に浸かった家では、車が通ったときに起こる波の水圧でガラスがみんな割れちゃったそうです。とんだ二次災害で、余計な出費になるものですから、「このやろう」と思うんですが、運転している人は気がつかずに行ってしまうんです。

うちも玄関ぎりぎりまで水がきて、「もうこれ以上来ないで」というときに車が通って、その波で床上浸水してしまいました。ほんとうに、車にはきてもらいたくありませんでした。

でも、車で近づいちゃいけないというのは、地元の人じゃないとわからないから、交通規制とかをきちんとしてもらわないとなと思いました。



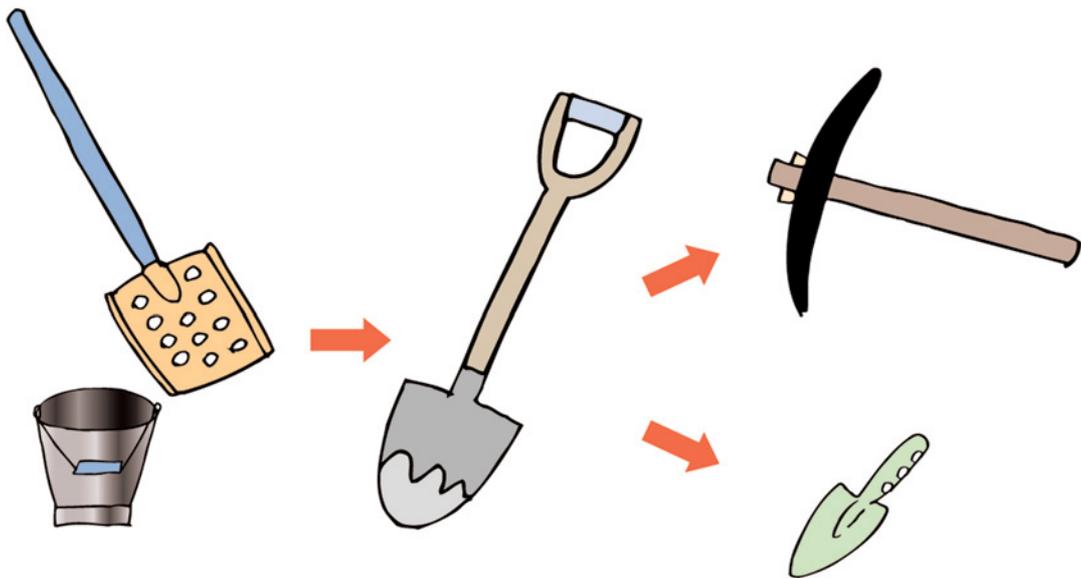
水害直後は雪かき道具、乾いてからはつるはし

（諏訪市 20代 女性）

水だけでも片づけは大変なんですけど、私の家では、泥も入ったので、その処理がすごく大変でした。

まだ泥がやわらかいうちは雪かきを使ってガーッと掻き出していたので、それを運び出すバケツが欲しかったんですが、固まってきたらスコップでも全くとれなかったんで、つるはしみたいなものを使ったり、水で流してやわらかくしてとったりしていました。家のすき間まで入り込んだ泥は、小さいスコップとか、掻き出す道具とかを買いに行きましたね。片づけにほしいものって状況によってどんどん変わっていくんです。

うちの地域で泥の片づけが2日3日で終わったのは、土木業や農業の人が多かったおかげだと思います。ひざぐらいまで泥があるときなんて、重くてどうしようもないので、重機で出してもらいましたし、いろいろな工具を持ちよって手伝ってくれたので、本当に助かりました。



軽トラックの「おせっかい隊」が出前ボランティア

（下諏訪町 20代 男性）

地域の川があふれて浸水被害が出ましたので、僕たちは日ごろから災害時のボランティア活動に備えていましたので、すぐにボランティアセンターを立ち上げました。

ところが、2日間ぐらいほとんど依頼が来なかったんです。被災した地域を見ると、まだ片づけが終わっていないところがありました。で、「自分たちから声をかけていけばいいんじゃないか」ということになり、「おせっかい隊」というのをつくって、仲間と2人で軽トラックに乗って、町を回りました。

「ボランティアセンターっていうのがあるんですよ」と言うと、「そんなのがあるんですか？知らなかったです」と言われました。行くところ行くところ、「こんなのあるんですか？」って感じで、庭の清掃やいろいろな頼まれるようになって、2人では手が回らなくなるほどでした。

「ボランティアやります」のチラシを回覧で回してもらったのですが、なかなか届かなかったからでした。中には、ボランティアセンターが閉鎖した後に届いたという家もありました。「情報を早く正確に伝えるのは難しいな」と痛感しました。



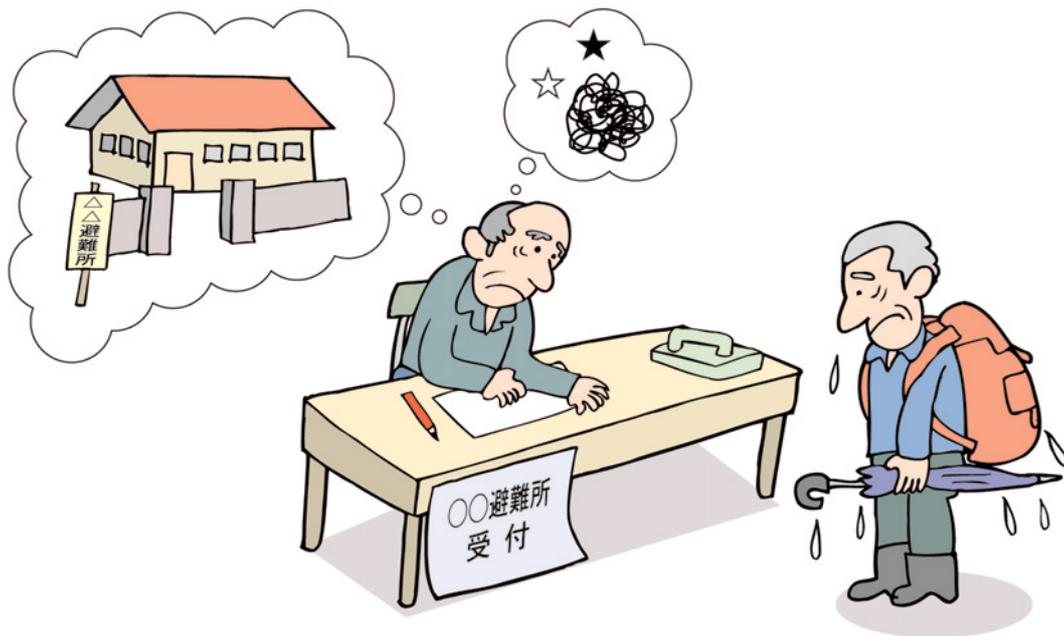
避難者受け入れで大混乱

（諏訪市 50代 男性）

私は、ちょうどこの水害のときに公民館長をやっていたのですが、腰あたりまで水が来ていましたから、ボートに乗って、市の炊き出しやら、ホテルの炊き出しやらの対応に夜中まで町内をぐるぐる回っていました。トイレに行けないおとしよりがいたものですから、ボートへ乗せて、ホテルまで送って、トイレを済ませて送りとどけるといのもやっていました。

町内をあちこち回っていると、近くの避難所へ行ったおとしよりで、割り当て地域が違うからだめだと言われた人がいたので、そこまで濡れて一生懸命としよりが行っているのに、また腰までつかって別の避難所に行くなんて、そんなばかなという事で、市のほうに抗議しました。

今までこんな大きな災害がなかったものですから、みんな混乱していて、市の職員の人たちも、疲れ切っていたんですね。そういった中で判断力も落ちてくるから、そこまで気が回らなかったと思うんですが、ちゃんとしたマニュアルとか、防災関係の教育をこれからしていけないといけないなと感じました。



ご近所の方も撮っておけばよかった被害写真

（諏訪市 50代 男性）

うちは床上浸水ということで保険とか災害の判定を受けたんですが、家のここまで水が来たんだよと説明する証拠に写真を撮っていました。矢印をかいたりマーキングしたりして、用意していたんです。

でも、それを用意しておかなかった家は、実際に床上に来ていても、床下だと言われかねない。気の弱い人は、「ああ、そうですか」と泣き寝入りしちゃうと思うんです。おじいちゃん、おばあちゃんなんかは、そこまで気が回らないと思うので、何かあったときには、自分も含めて、おとなりのうちの写真を撮っておこうとか、そういう助け合いもすごく大事だなと思いました。

あと、家を借りている人なんかは、災害に遭って住むところなくなって困ったという話をいっぱい聞いていますので、地域とか市のほうで、防災訓練をするときに、弁護士さんをよんで借地権とか補償とかの話をしていただければありがたいと思います。



出先事業所に伝わらなかった本社の被害状況

なぜ休みと問い合わせ相次ぐ

（諏訪市 50代 男性）

わが社は、県内にいくつも事業所をもっているのですが、それぞれ気象条件が違いますね。本社の周辺は被害が大きかったのですが、臨時休業の判断をしたのですが、それほど被害のない地域の事業所からは、「なんで臨時休業するんだ」と、こちらの状況を理解してもらうのに時間がかかりました。

東京の人は、通常通り勤務していて、基本的に仕事ではテレビなんか見ませんから、「何だ、きょう珍しいな、だれも出ないのか」と思うくらいで、ずっと電話を鳴らしていたそうです。

「今、こういう状況です」と、本社の状況、周辺の国道、JRの状況をこと細かく電話で説明するしかなくて、一番苦労しました。

後から思えば、防災本部の組織の中には、広報とか記録のために被害写真を撮る担当がいますので、写真とかそういった情報を流していたら、早かったのになと思います。



20年以上前の水害の教訓が生きた

出張中の社員をゴム長で救出

（諏訪市 50代 男性）

諏訪湖の周りにホテルがたくさんありますが、そのホテルに泊まっていた出張中の従業員が3人くらいいますね。ホテルは水がついていて危険だから停電していて、電話も通じないし、外にも出られないというわけで、携帯電話で連絡してきたんです。

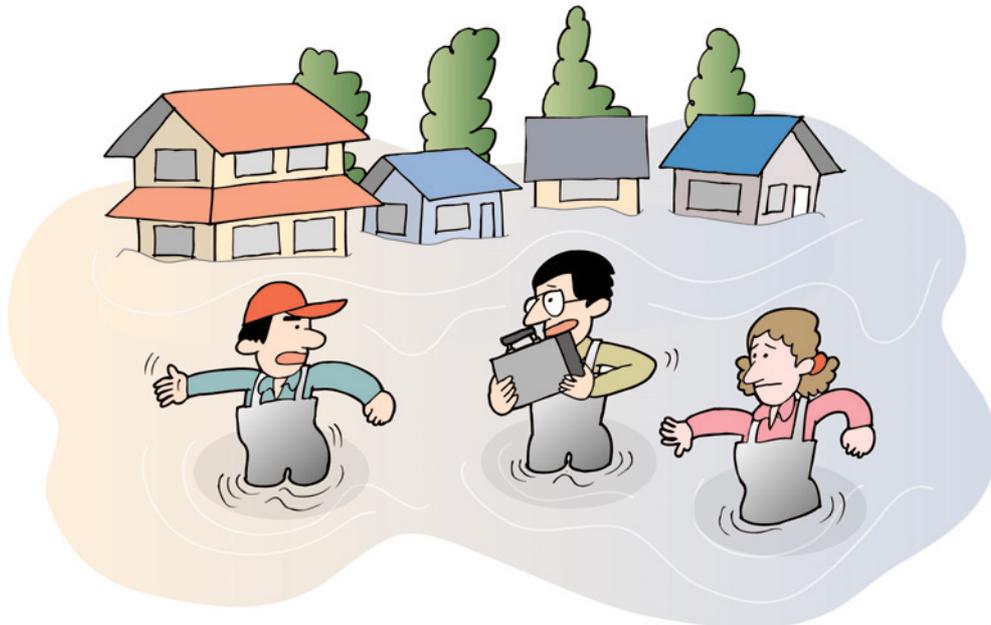
会社の防災備品でゴム長*を持っているものですから、あれを着て、うちの若いのがホテルまで助けに行きましたよ。予備のゴム長を届けて、女性の従業員にもそれを着てもらって、本社につれてきました。ちょうどその様子がお昼のニュースで流れたはずですよ。

阪神・淡路大震災の後、防災本部職員はできるだけ会社へ出るという方針があって、3日分ぐらいは、食料とか生活必需品はできるだけ揃えるようにしていたのですが、ゴム長は20年くらい前の水害の時から防災備品になったものでした。ポートも2そうあります。

確か役員を救出するのに使ったとかで。まさか、こういうところで使うとは思わなかったですね。

*ゴム長とは、胸元までカバーするゴム製の防水ブーツ（ズボン）のこと。胴付長靴、胴長靴ともいう。

*昭和58年（1985年）9月洪水では、台風10号の影響で、天竜川全流域にわたって200～350mmの雨量が記録され、諏訪湖周辺およびその下流の伊那市周辺、飯田市に大きな被害が発生した。



失敗を教訓に、全社いっせいの訓練

（諏訪市 30代 男性）

当日の朝、普通に家を出て、車で会社に向かう途中の、7時ちょっと過ぎぐらいでした。

職場の連絡網で、高速道路は土砂くずれ、中央線も運休ということで、長野県内の事業所はすべて臨時休業という連絡が回ってきました。上司からは「出社しなくてもいい」といわれたんですが、「一応、行ってみます」といって、会社に向かいました。結局、4時間半かかりました。

通勤圏を考えると、早い人は6時ぐらいには家を出るものですから、3,000人ぐらいの従業員がいる大きな事業所では、「今からじゃ、間にあわない」ということで、連絡網は回さずに、入口の警備所のところに人を立てて、出社してきた人に「臨時休業だよ」と説明して帰ってもらいました。

臨時休業の判断が遅くなってしまったという反省から、その後、臨時休業の判断基準とだれが判断するかを文書でまとめたり、県の防災の日にあわせて、全社一斉で連絡網を使った情報伝達訓練をやったりしています。



うちの事業所に、本社の危機管理委員会がやってきた

（諏訪市 50代 男性）

本社は水がついてだめだということで、被害のないうちの事業所に臨時の危機管理委員会を立ち上げることになりました。本社から危機管理の担当の方が集まってこられたので、広い応接室に、ホワイトボード、紙、プロジェクターを用意しまして、緊急電話も引けるように手配しました。

危機管理委員会では、まず、今日やるべきことは何かを話しあって、まず、従業員、家族の安否、家屋の被害状況の確認。それから、会社の建物とか設備の被害の状況を確認。

それに、翌日の出勤の可否の決定を出すために、何時までに確認をとって、何時ごろから連絡網を流すかを決めていました。

うちの事業所には、テレビ会議も非常電源も両方使える部屋があったものですから、後から考えると、そちらを使ってもらったほうがよかったのかなと思ったのですが、本社の方からは、「広く使えて、机なんかも移動しやすい、あの部屋が良かった」といってもらっています。



本社役員の家から「土のう積んで」とSOS

（諏訪市 50代 男性）

水害対応で本社に待機しているときのことですが、諏訪湖の近くに住んでいる役員から連絡がありまして、「外へ出られないから、土のう*を積みに来てくれ」と頼まれました。

玄関まで水がついている状態だということで、「床上に流れ込むのだけは、とにかく防がなければ」ということで、会社の車に折りたたみ式のリヤカーと土のうを乗せて向かいました。

途中までは会社の車で行けたんですが、あとはリヤカーを引いて水のところをジャブジャブ歩くしかなくて。一部、リヤカーが浮くような場所もありましたよ。

ほかの役員の中にも、自宅の周辺に避難勧告が出て、一時的に避難所にいかなければならないような状態もあったものですから、こういうときの経営陣の対応をどうするかも考えておかなければと思いましたね。

*土のうとは、布袋の中に土砂を詰めて用いる土木資材のこと。適宜、土砂を詰め、袋を縛り積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができることから、堤防の水止めなどに使われます。



消防団員の従業員に特別休暇

（諏訪市 30代 男性）

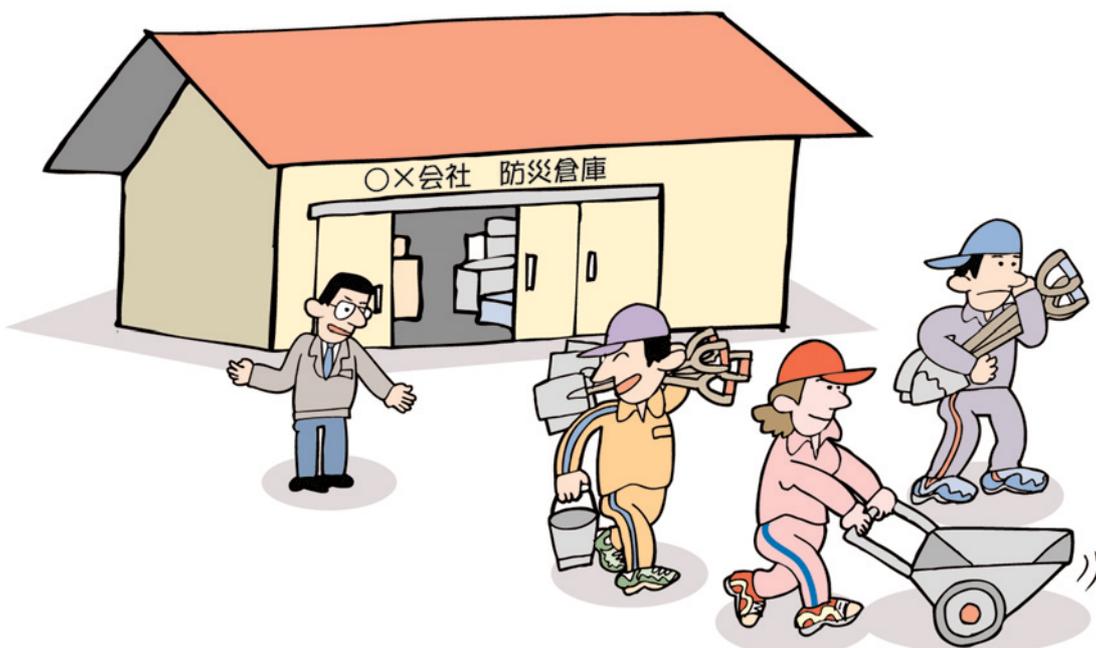
本社の横にある会社の体育館は、市との協定で災害時の緊急避難場所になっています。

今回の水害でも、市役所から「もしかしたら開放をお願いするかもしれない」と電話があったので、毛布を出して準備はしていました。

結局、そこを使うことはなかったんですけども、水害の直後は、行方不明の方もおられたので、消防団をやっている従業員は、特別休暇ということにして、そちらに協力してもらいました。

従業員の中には、週末に地域の片づけを手伝いたいというものがいましたので、会社の防災備品のスコップとか、そういった道具を使ってもらいました。職場の仲間が被災した地域でもあったので、お手伝いにいきたいという気持ちが自然とでてきたんでしょうね。

かなりの人数がボランティアに集まったようです。会社としても地域のために何かしたいという従業員をできる範囲で応援したいと思っています。

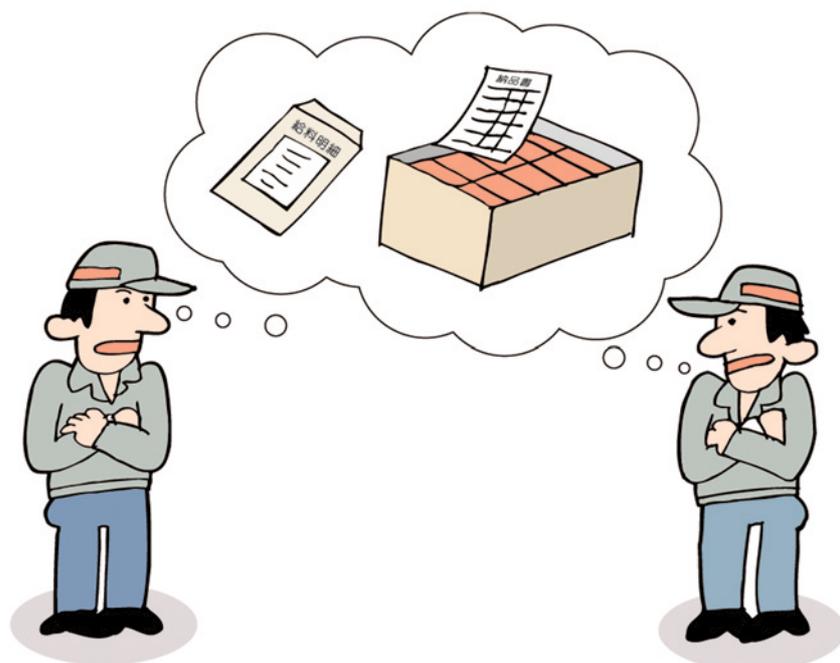


「まだまだ長雨」と最悪のシナリオを考える

（諏訪市 50代 男性）

水がついてから3日目が金曜日で、雨は小康状態になっていたんですけども、また週末にかけて大雨になりそうだというような天気予報が出ていました。だから、会社の危機管理委員会では、万が一、土曜日、日曜日にまた大雨が降って、月曜日に会社に出てこれないようなときには、月末の従業員の給与の支払いですとか、業務の締め切りですとか、業務上必要なことをどうするかを、財務とか、人事とか、労務のメンバーと打ち合わせておきました。幸いにも、週末は大雨にならず、それ以降、大きな被害がなかったもので、よかったのですが。

今回は、たまたま本社や危機管理委員会を置いた事業所に、いるべき人がいたので、そういう対応がとれたように思いますが、これが地震なんかで、被害が分散していたらもっと大変だったと思います。だから、そういう事態をいかに想定して、体制をととのえておくかが、今後の課題だと思っています。



臨時休業でも、気になっていたお客様との約束

（諏訪市 30代 女性）

実家が被災して浸水してしまったので、私はその後片づけをしていました。

自分の勤めている会社も臨時休業になったのですが、実は、一番大事なアポイント*がその日にあったんですよね。自分も大変だけどお客様に迷惑かけちゃいけないから、どうにかして連絡をとりたかったんですが、会社に行かないとお客様の連絡先がわからないし、一緒に打ち合わせるメンバーの電話番号もわからないということで、結局、警備所の人に、「お客様がいらっしゃると思うので、丁寧に説明して帰ってもらってください」と頼みました。

実際に、お客様はわざわざ来てくださっていて、後でお詫びはしましたが、仕事のしめきりもあったので、水害の片づけをしながらもずっと気になってしかたがありませんでした。

*アポイントとは、商談や打合せの約束のこと。



道路に植木の箱がプカプカ

（名古屋市 50代 女性）

雨が降りそうだからと早めに自宅に戻った晩に、ものすごい雷が鳴りだしました。で、一瞬、ピカっとなったとたん、停電になりました。うちのビルのケーブルテレビのアンテナに雷が落ちたようで、周囲は電気がついていました。で、テレビの情報がストップしてしまったので、それからはラジオとインターネットで情報を集めました。

午後11時ごろが雷のピークで、ネットで調べたら、「避難準備勧告」が出されていました。同じ地区に住むボランティア仲間からも、マンションの駐車場の車が水で大変なことになっているというような大雨に関するメールがいくつか入ってきていましたので、「これはいかんな」と。

ビルの屋上へ出られたので、懐中電灯で照らしてみると、よく玄関前に置かれている植木や花が入っている発泡スチロールやミカン箱が道路にプカプカ浮いていました。車はそんなものはお構いなしにけ散らして通るからゴミと一緒に散乱していました。

ああいうものも、普段から雨が降ってきたら、玄関から家の中に入れるとか、流れていかないように工夫するとかすることも必要なのかなと思います。



マイカー水没の経験生かす

（名古屋市 60代 男性）

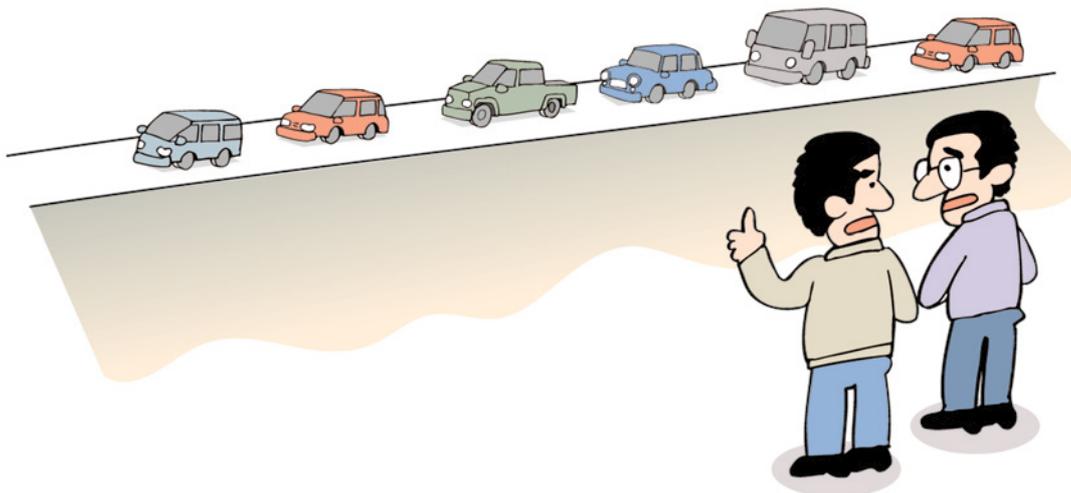
私は実を言うと、8年前の東海水害*のときに買ったばかりの新築の家が床下までつかったという、とんでもない経験があります。

私の家は6軒の建て売り住宅のひとつで、他のみなさんと同じ時期に入居したんですが、いつも雨が強く降り始めると、近くにある高い土手のところにご近所の車がずらっと並ぶんですよ。「何でなんだろう」と、新しく入った仲間同士で話していました。

ところが、当時雨がはげしく降ってきて、タイヤの下あたりまでだった水が、だんだんこう上がってくるわけですよ。どの段階で上の方に移せばいいんだろうって、みんなが迷っているうちに、もう抜き差ししなくなっちゃって、家は床下浸水になり、車も使いものにならなくなっていました。

だから今回は、これだけ雨が降ったら、どれぐらいの水が溜まるとか、いつごろ車を上に上げなきゃならないかということがだいたい分かっていたので、大雨に関する情報をテレビやラジオなどで一生懸命集めて対応できました。

*東海水害：台風14号（平成12年）に伴い東海地方を襲った集中豪雨は、愛知県下に甚大な被害をもたらした。



雷が激しく鳴ったら大雨に注意

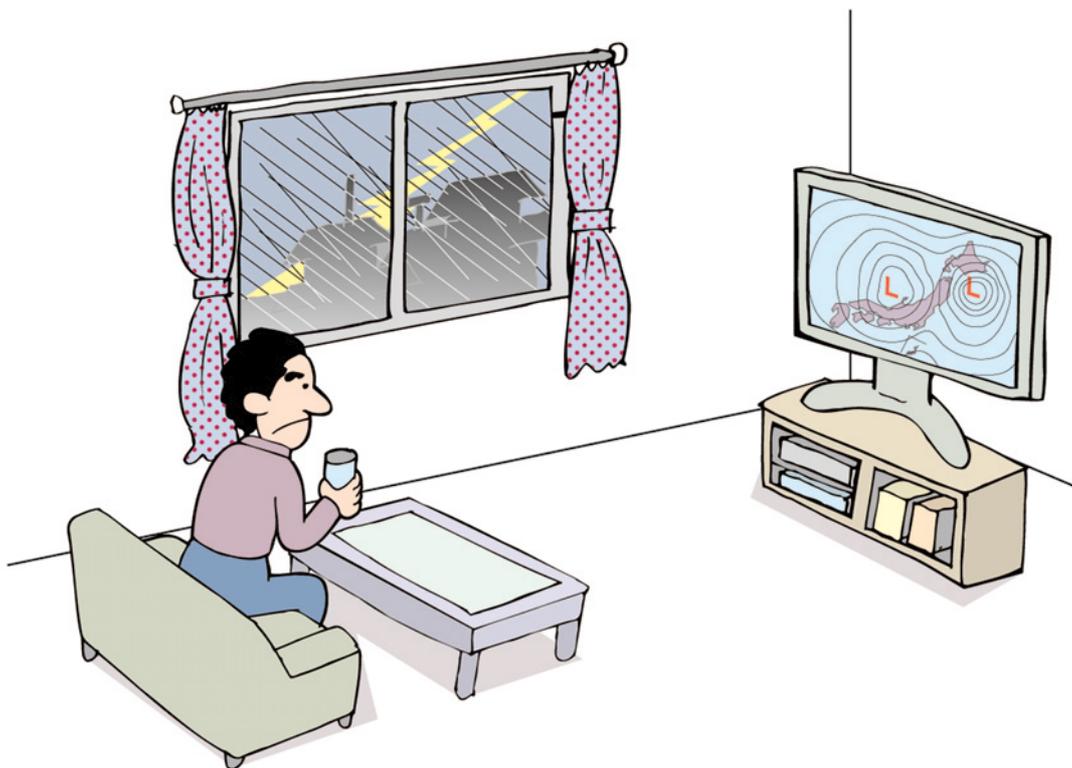
（名古屋市 70代 男性）

今回の水害で、みなさんもっと気象情報を活用してほしいなと痛切に感じました。それを見て、早目に持ち出し品なんかを用意しておいて、水が来たときには既に逃げた状態に持っていけるような準備をすることが大切だと思います。

天気図を読めなくても、気象情報の雲の動きを見ればその後の雨の動きがつかめるんですよ。あの日も、NHKの場面がパッと切り変わって、「東海豪雨と非常に似ている」ということだったので、風が出た場合に備えて、ベランダとか家のまわりにあるものを固定しました。

今回雷がすごかったんですが、振り返ってみると、東海豪雨のときも雨になる前に雷がすごかったなと。また、それほど災害としては騒がれなかったんですけど、昭和40年代にこの地域で水害が起きたときもやっぱり雷が長時間鳴っていた記憶があります。

裏づけはわかりませんが、雨がまだそれほど降っていなくても、雷がはげしく鳴っている場合はやっぱり最悪の場合を予測したほうがいいんじゃないかと私は思っています。



停電でケーブルテレビ映らずワンセグ*で雨量知る

（額田郡幸田町 30代 男性）

その夜は、雷と雨がひどかったので、なかなか寝つけず、とりあえずケーブルテレビを見ていたんですが、近くに雷がおちて停電してしまいました。昔から「雷が光ったら数える。3より前にドンときたら近い。」というじゃないですか。その夜は1、2でドンとくることが多くて、雨も雷も今までにないすごい音でした。

電気は30分ぐらいでついたんですが、ケーブルテレビは次の日の夕方ぐらいまでつきませんでした。あまりにすごい雨だったので気になっていたら、たまたま携帯でテレビが見られるのを思い出して、見てみようということになったんです。今は携帯が便利ですからね。そしたら、この地方で時間100ミリの雨が降ったといっていたので、「2000年*に切れた堤防が、また切れるかな」という予感がしました。

翌朝起きたら、やはり未明に堤防が切れていて、あたり一面の田んぼが浸水して湖のようになっていて、「これはすごいことになった」と思いました。

*ワンセグとは、地上デジタル放送で行なわれる携帯電話などの移動体向けの放送のこと。

*2000年とは、平成12年9月10日からの大雨等（2000年9月東海豪雨とも呼ばれる）のこと。



10分たらずで床上138センチ

助けたのは愛犬だけ

（岡崎市 70代 男性）

異変に気がついたのは夜の11時ごろでした。外はものすごい雨と雷で、飼っていた犬が雷をこわがってあまりに鳴くものだから、かわいそうになって玄関へ入れてあげたんです。

それからしばらくたって、午前1時ごろだったか、何か変な音がするものだから「何の音かな」と思って、ひょいと玄関を見ると、ドアの下、戸のすき間から水がプチュプチュと入ってきていました。

「これは大変だ。戸をあけたら、水がダッーと家の中に入ってくるぞ」と思い、寝ていた家族6人をおこすと、犬をかかえて、すぐ2階へあがりました。そのころには、もう、畳が床下からくる水の流れで浮きはじめていました。

結局、10分たらずで、床上138センチまで水に浸かってしまいました。1階はほとんど全滅で、パソコンやテレビ、エアコン、衣類や書類、アルバムなど、すべてがだめになってしまいました。助けることができたのは犬だけでしたね。

パソコンに入れておいた年賀状の住所録が消えてしまったのがすごく残念だったので、今は、大雨が降るたびに、パソコンを2階に持っていくんです。



「おやじ、避難しろ」で目がさめた

気づいたら浮いた畳の上

（岡崎市 70代 男性）

この地区では過去4回、床上浸水がありました。2000年の東海豪雨のあとで、行政が橋のかけかえや排水ポンプの設置など、いろいろ整備していましたが、家も1メートルぐらいかさ上げしていたので、もうある程度は安心だと思っていたんですね。

いつもなら、夜に雨が強く降ると気になって寝られないのですが、昼間に、下水があふれたところですからすぐに水が引くのを見ていて、何となく安心したせいもあって、うとうとと寝ていました。

「おやじ、避難しろ！」と2階で寝ていた息子に起こされたのは、夜中の1時半ごろでした。そのとき、すでに床上まで水がきていたのですが、私は気づかずに、浮いた畳の上に寝ていたわけです。

たぶん、川の水があふれたせいだと思いますが、またたくまに水がやってきたんです。

息子が起こしに来てくれたからよかったものの、そうでなかったら逃げ遅れてしまっていたかもしれません。



走る車で浸水拡大

（名古屋市 70代 女性）

商店街に住む人は、お店のシャッターが閉まっちゃったら、隣近所がどうなっているのか全然わからなくなっちゃうんですね。いつの間にかお店が水浸しになって、あわてた人が多かったようです。

あの辺りは、歴史を調べると、昔々は沼や水田や畑だったと書いてありますから、今回水につかってしまったのも不思議ではないと思います。

で、降った雨が流れていかない商店街の真ん中の道路を、自動車が通るたびに大波が立って、商店街のお店の中まで水が入ってきちゃったんです。

だから、今度同じようなことが起きたら、一番最初にやらなきゃいけないのは、自動車の通行を止めることだと思います。台風には学区全体でそれなりの対応ができるようになっているけれど、狭い地域のトップである町内会長さんのところには、通行止めに必要な道具とかもなかったのです。通らないように口で言ってもなかなか聞いてくれませんかから、そういう準備はしておかないといけないと思いました。



「ボランティアします」新聞販売店でPR

（名古屋市 50代 男性 NPO代表）

私たちは、翌日にはボランティアセンターを立ち上げ、水害の後かたづけなどのお手伝いをしようと意気込んでいましたが、センターへの依頼は思ったほど多くは来ませんでした。

今回は内水氾濫*でしたから、水は雨が止んでしばらくするとサーッと引いてしまうんですね。2日後ぐらいに被災した地域を歩いてみましたが、どの家が水につかったのか判断がつかないほどでした。

そこで、通りにあった新聞屋さんの店頭で「ボランティアします」という張り紙を貼らせてもらいました。泥出しや後かたづけなど、お手伝いするのでとにかく連絡をして下さいということですね。

それからは、その張り紙を見たという人たちから依頼がくるようになりました。我々ボランティアの存在を意識していない人たちからのニーズをどう掘り起こすかが、これからの課題のひとつではないかと思えます。

*内水氾濫とは、川から水があふれたのではなく、町や農地に降った雨がそのままあふれることをいう。



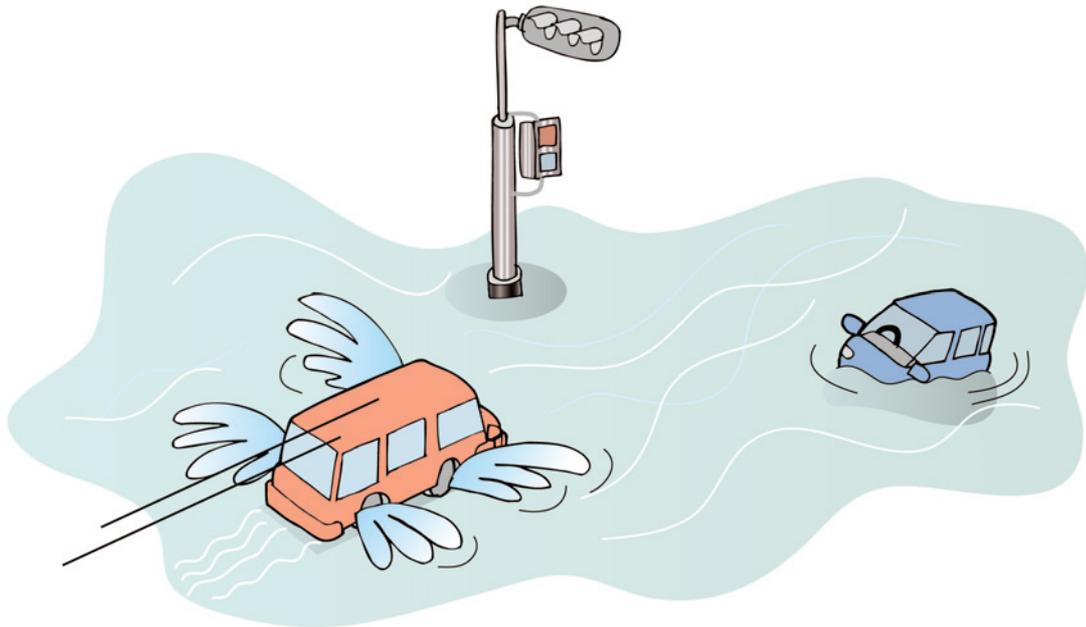
交差点で車が水泳

（名古屋市 60代 女性）

その交差点はすごく排水能力が低いところなんです。マンションの窓から見てみると、雨がどんどん降るにつれ、いろいろなところから流れ込んできた水がたまって、まるでプールようになっていました。

そこを2000ccクラスの大きな車が通ると、大きな波が立つから、真ん中で信号待ちをしている軽自動車が浮かんでゆらゆらと動いているんです。まるで、「オリンピックは終わったのに、今度は車が水泳をやっているな」という感じ。乗っている人たちは生きた心地がしないだろうなと思いながら見ていました。

途中で引き返してきて歩道を走って避難する車もかなりいましたね。水ってというのは、ほんとうにあっという間に増えてくるので、「道路がちょっとでも冠水してきたら、車は運転しない」ということを水害対策の1つに入れてほしいなと思います。



ひとり暮らしだけどひとりじゃない

みんなに助けられて幸せ

（名古屋市 70代 女性）

私はひとり暮らしですから、水がついた前の日も、お向かいさんが心配して電話をかけてきてくれたり、近所の人からあぶないからうちへいらっしゃいと声をかけられたりしました。普段からそのように私もおつき合いしているから、気にかけてくれたんだと思います。

夜半から雨がはいよいよ激しくなって、心配で寝られないまま朝を迎えました。リュックにはお父さんの位牌やら、着替えやら、大事なものだけを入れておきました。そして朝になると、通りにはヒザぐらいまで水が出ていて、表においてあったものはみんなどこかに流されてしまっていました。

部屋の畳の上に乗ったらポコッと浮くんですよ。あっけにとられていたら、町内会長から電話があって、「今からボランティアの人たちが来てくれるから、畳出しもやってもらえばいいよ」と言ってくれたんです。ボランティアの人たちが来てくれた時は、ありがとうという感じで、本当にうれしかったです。



災害は地震だけじゃない

水害への備えも必要なボランティア

（名古屋市 70代 男性）

私は、年だから早く寝るし、雨戸を閉めているので、あの豪雨のときも何が起きているのか全然わかりませんでした。いったんはうちの前もある程度水がたまっただと思うんですが、さっと水が引いてしまったために「何だか葉っぱがたまっとるな」くらいの感じでしたね。

午後になって、「ボランティアセンターが立ち上がりますよ」という話があって、どこかで大きな被害が出ているんだなとやっと気がついたという状況でした。

実際に何軒かのお宅のお手伝いをさせてもらいながら、ボランティアの仲間たちと、「これからはこういうことが時々起きるんじゃないか」というような話をしました。

名古屋で東海地震の被害があると言われてから、私たちは地震について重点的にいろんなことを勉強してきたし、地震を想定した訓練にも参加させてもらったりしてきたけど、水害ということは全然頭になかったんですよ。今回の水害を体験して、次はこういうことをした方がいいとか、こういうことはだめだとか、いろいろ勉強になりました。



被災したら、私は「助けてください」と声を上げます

（名古屋市 60代 女性）

ボランティアとしてお宅を訪問しても、みなさん非常に頑張っておられるというか、「どうですか」と声をかけても、なかなか、「はい、どうぞ」と言ってもらえない。「自分でやるからいい」とか、「日曜日まで待てば息子が来て手伝ってくれるから」とかね。私たちとすれば、もっと頼ってほしいという気持ちでいっぱいでした。

最初はこういうボランティアがあること自体を知らない方がほとんどでしたが、少しずつ口コミで広がっているなと感じましたね。

ただ、すぐに声をかけてくれなかったあるお宅に行ったとき、部屋の畳の上にふとんが何枚も何枚も積み重ねられていたんです。畳がぬれているから、何枚ふとんを重ねても時間がたつと下からだんだんしみ上がって来るんですよ。一番上にはビニールシートが敷かれていました。結局その湿気で床が腐り、片づけの途中で重さに耐えきれず床が落ちてしまうという悲惨な結果になりました。

見知らぬ人をおうちの中へ入れるということは私も嫌ですが、もし私がそういう立場になったときは、勇気を出して「助けてください」という声を上げたいなと思っています。



寝ながら携帯電話にぎりしめ

（額田郡幸田町 60代 男性）

その日は落雷のために停電になっていました。近くに雷が落ちるたびに、あたり一面が真っ白になるくらい明るくなって、雨の音も今までにないくらいすごい音でした。ふだんなら寝ている時間ですが、消防団に入っているので、「これはいかん、あぶないな。」と思い、すぐに出られる用意をして、うつらうつらしていました。うちの電話はIP電話*なので停電で使えなかったものですから、連絡がきたときのために携帯電話を持ったままでした。

そうしたら、夜中の3時くらいになって、役場から堤防決壊の連絡が来たので、すぐに消防団の詰所に行きました。明るくならないと状況がわかりませんし、「人命が大事だから特に危険なところには近づくな」ということだったので、朝になってから地域全般を見回りました。日頃から防災訓練などをして地域のことはよくわかっているのですが、堤防が決壊しても人家への浸水はないと思っていましたが、山があるだけに土砂崩れが心配だったんです。

*IP電話とは、音声をデジタルデータに変換し、ケーブルテレビ回線や光ファイバー回線などを介してやり取りする電話のことで、正式名称はインターネットプロトコル電話。一般加入電話と同じように使うことができる。



欲しかった通行止めの表示板

制止ふり切り、車が水没

（額田郡幸田町 60代 男性）

地区の中で40センチぐらい水につかった道路に、朝の7時半ぐらいになると通勤の車が突っ込んできて動けなくなっていました。私たちが「通れませんよ」といっても、強制はできないので振り切っていく車もあって、5、6台の車が水没してしまいました。

車はそれぞれ車高が違いますから、車高の高い車は通れても、普通の乗用車は通れないことがあるんです。それを知らずに、前の車が通ったから大丈夫と思って入って動けなくなる車もありました。近所の農家の人に助けを求めて、ワイヤーをかけてトラクターで引っ張り出してもらった人もいたみたいです。

通行止めの柵などが地区にないので、最初は地区の人間が立つか、コーンを立てるぐらいのことしかできませんでした。しばらくして、消防署から人が来て、ようやく全部通行止めにしてくれました。地区の集会場あたりに通行止めの表示板だとか、そういうものを準備しておいていただければ、役場の方が来る前に通行止めができるのになと思いました。



住民もボランティアで田んぼのごみ拾い

（額田郡幸田町 60代 男性）

水害で浸水した田んぼには、あき缶だとか、プラスチックのかたまりだとか、たくさん流れこんでいました。農協さんが240人くらいで田んぼのごみ拾いに来てくださるということだったので、それにあわせて地域の方にもごみ拾いのボランティアをお願いしました。

「洪水で生活関連のごみが田んぼに流れこんでいるので、ゴミ拾いのボランティアに協力して下さい」というふうに放送で流したんです。

当日は、若い女性の方とかおとしよりの方とか、農業を専業でやっていない方が大勢加わって80人も参加してくださいました。終わりの時間になっても、積極的にやってくれた方もいて、本当にきれいになりました。ちゃんとお礼の放送も流しましたよ。この地域では、昔から「川役、道役、草役」*の「三役」というのがあって、農家、非農家関係なしに参加する伝統があるので、それで、たくさん集まってくださったのかもしれないね。

*川役は川の清掃活動、道役は沿道の清掃・整備活動、草役は草刈りのこと。



助けてあげたかったおとなりの奥さん

（岡崎市 70代 男性）

おとなりに老夫婦が住んでいたのですが、ご主人は体が弱く、市に要援護者の登録をされていました。だから、うちの床上まで水がきた時に、すぐおとなりさんのことが頭をよぎりました。でも、水はどんどん上がってくるし、おとなりの雨戸は閉まったままだし、あたりは真っ暗で、助けにいける状況じゃなかったなので、携帯電話で119番通報をしたんです。

119番が全然通じなかったので、今度は110番をして、警察の人に、「おとなりの方が逃げおくられているようだから、助けてください」とお願いしました。たしか、避難勧告が出たのはその後だったと思います。

約1時間後にゴムボートで消防の人が救助にきてくれた時には、平屋建ての屋根の近くまで水が来ていました。ご主人は家の台所の窓から自力で出て、隣のマンションの人に助けられたのですが、残念なことに、奥さんは逃げおくられて亡くなられたそうです。

こんなことになると1時間でも前に分かっていたら、自主避難もできたはずなんです。

おとなりさんを助けられなかったことが一番の心残りです。



見舞いの車や路上のごみで収集車入れず

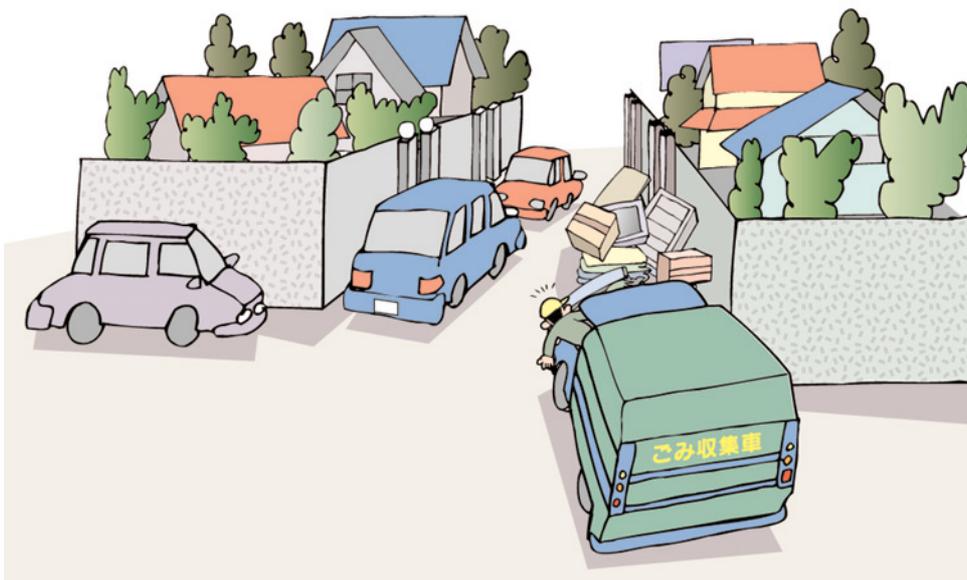
（岡崎市 70代 男性）

水害にあった家は、まず泥をかぶった家財をごみとして出すのですが、当初、市からは「ふだんどおりに分別して、指定のごみステーションに置いてください」と言われました。

だけど、泥のついた畳などは60キロ近くするので重くてそこまで持っていけないということで、家の前を出していいことにしてもらったのです。

ところが、うちの地区にはごみ収集車は丸一日来ませんでした。なぜかという、見舞いの人とか親戚の車が道いっぱいにとまっていて、ごみ収集車が入ってこれなかったんです。他県ナンバーの車の中には、お金になりそうなゴミを勝手に持って行く人もいたので、交番に交通整理とパトロールを頼みましたが、「人手不足なので」と言われ、結局、私が3日間、交通整理をやりました。

見舞いの方からの差し入れはありがたいし、助かった部分も多かったのですが、停めてある車のせいで、ごみ収集車が通れなくなるのは、ほんとうに困りました。



町内にボランティアのサテライト

地元の問題解決にひと役

（岡崎市 70代 男性）

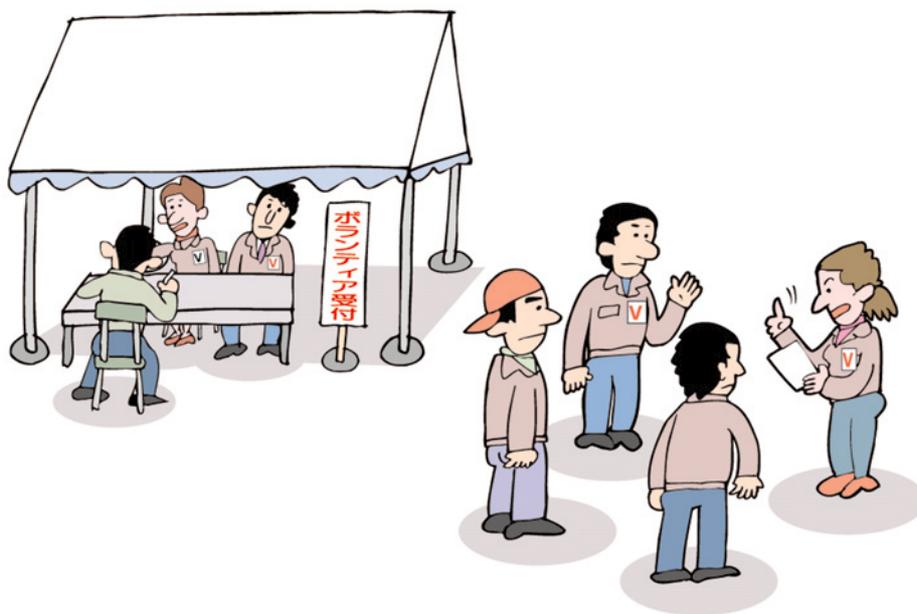
私は総代*をやっているのですが、うちの地区の被害が大きいことを知った社会福祉協議会から、「ボランティアさんが来てくれます。何人要るか、自己申告してください」と連絡がありました。

当時は、地元にはボランティアを受け入れるコーディネーターという人がひとりもいませんでした。私がそれをやる役目と思われていましたが、とてもそんなことができる状態じゃなかったので、「できません」と言いました。しばらくそれでもめましたが、地区の中にサテライト*を作ってもらおうことになって、問題が解決しました。

サテライトがないころは、ボランティアの本部に電話しても通じなかったり、現場のことがよくわかってもらえなかったりで、要領を得ませんでした。だから、サテライトが地域にできて、ものすごく助かりました。私は、今回の水害で一番助けもらったのは、ボランティアの人たちだと思っています。

*総代とは、町内会の代表者のこと。岡崎市ではこの呼称を用いている。

*サテライトとは、ボランティア活動の調整を行うボランティアセンターの地域事務所のこと。



水害の片づけより予約客

気丈に働くベテラン美容師

（名古屋市 70代 女性）

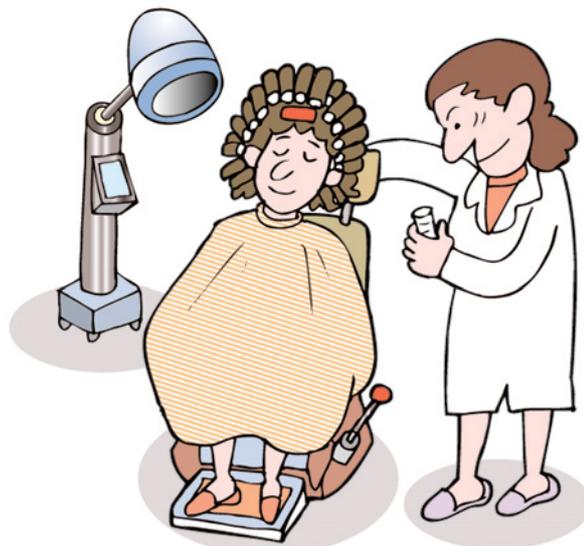
民生委員*の私は、「昨日は水が入って大変だったんだよ」という声を聞いて、商店街で美容院をやっている1人暮らしの方のところへ走りました。

川が氾濫したわけではなく、排水溝の能力を超えて降った雨で町の低いところに水がたまって起きた水害でしたから、その時にはすでに通りの水は引いていて、どこに水がついたかわからない状況でした。

80才に近いその方のお店に入ると、いつものように仕事をされていたのでおどろきました。まだお店の床はぬれていましたが、「お客さんの予約があったから休むわけにもいかない」とおっしゃってね。夜中に何か騒がしいから1階のお店に下りると、全部水につかっていたとのことでした。

朝には商店街の大掃除にも出たというので、「そういう時には私が代わりにやっ
てあげますから、連絡してくださいね」と言うと、「頼んでもいい？」って言われ
るから、「いいですよ」と。おとしよりはどうしても遠慮がちなんです。もっと気
軽に頼んでもらえたらいいなと思いました。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応
じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配
置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



水田にあふれた水から威圧感

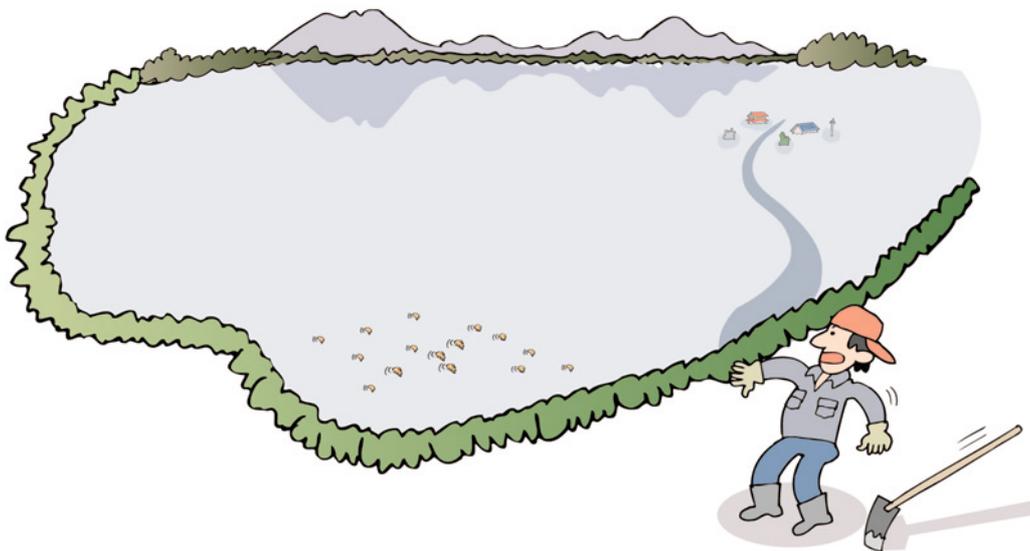
（額田郡幸田町 30代 男性）

朝、6時ごろかな。仲間の農家の方が電話をくれて、「おまえのところはすごいことになっている。テレビで流れていたぞ」というので、坂を下って田んぼを見にいったんです。

その時はもう晴れていて、あたり一面、湖というか沼のようになっているのが見えました。ふだん、田植えの時に水をはると、湖の水面のように見えることはあるんですが、それとは全然違う。水面の位置が高くなっていたので、すごく威圧感がありました。

翌日になって、いったん仮閉めした堤防がふたたび決壊するのを、親父が見ていたんですが、水がこちらに向かってくる感じがしたそうです。あふれた川の水が堤防をのりあげ、堤防がだんだん下がるように見えたので、「堤防がきれたな」と思ったとたん、水位が増して徐々に自分の方に向かってきたとも言っていました。水の勢いが速かったので、さぞ怖かっただろうと思います。

昔、この一帯が池だったとは聞かされていましたが、あそこまで広い範囲に水がついた風景は初めて見ました。でも、水が少し引いてた後、水面に向こうの山が逆さ富士みたいに映ったのは、それはきれいだったですよ。



稲刈り直前、水に浸かって収穫できず

（額田郡幸田町 30代 男性）

このあたりでは、「コシヒカリ」と「あさひの夢」と「あいちのかおり」という3品種を時期をずらしながら作っていて、最初に収穫するコシヒカリはだいたい8月25日から9月10日ぐらいに稲刈りをします。

今回は、3日前にコシヒカリを刈り始めたばかりだったので、収穫のはやい田んぼもおそい田んぼも両方水につかってしまいました。二日たってポンプの排水が始まったのですが、水はどれくらいで引くかと尋ねたら「もう一日必要」と言われ、「今年の収穫はあきらめよう」と思いました。3日も水に浸かったらダメですからね。

排水が完了して、田んぼに入りましたが、ものすごく泥臭い。稲に臭いがついてしまっているので、その時点で農協さんと話して出荷停止を決めました。ちょうど事故米のニュースが話題になっていたので、加工米向けに出荷しても品質の責任はおえないということですね。

2000年の水害*は9月中旬で、コシヒカリの収穫は終わっていたから、そこまですべて被害はひどくなかったんです。今回はタイミングが悪かったなと思います。

*2000年の水害とは、平成12年9月10日からの大雨等（2000年9月東海豪雨とも呼ばれる）のこと。



すばやかだった区役所の対応

ボランティア業務をサポート

（名古屋市 60代 女性）

水害の後、私たちボランティアがローラー作戦でニーズの掘り起こしのために被災地域を回った時は、人手のあるお宅はすでに家族でかたづけをした後らしく、道ばたにもものすごい量のゴミの山ができていました。

でも、区役所の対応もすごく良くて、総務課の人が、ゴミのことは環境事業所に電話してくださいとか、何々でお困りの方はどこそこへ電話してくださいとか書いたチラシを配ってくれていて、事務的なことはパパパッとやってくださったものですから、私たちはボランティアとしての作業だけに専念することができました。

やっぱり社会福祉協議会*や区役所のみなさんの協力というか、みんなの連携がうまくいったからこそ、ボランティアとしての役割が果たせたのではないかと、しみじみ思いましたね。

*社会福祉協議会とは、福祉サービスの提供やボランティア活動の支援など、地域の福祉の向上に取り組んでいる非営利目的の民間の組織です。



「ひまわり」の雲画像見て異変気づく

魚釣りの趣味活かし

（額田郡幸田町 50代 男性）

いったん注意報になっていた大雨洪水警報が再び発令された時、私は役場から帰って自宅にいました。雷が鳴り始め、気象庁のホームページで「ひまわり」*の画像を確認しました。

すると、いつもは西の方から順に雲が流れてくるのが、すぐそばの南の海側から雲がぽっとわき上がっているようでした。「ちょっとおかしいな、こういう動きの雲は今までない」と思って、すぐ第一次非常配備を決めました。趣味で魚釣りをやっていて、船やボートに乗るので、よく「ひまわり」の画像や天気図を見ていたので、雲の形がいつもと違うことに直感的に気づいたのです。

役場に来て本部を立ち上げているうちに、みるみる雷と雨が強烈になって、参集してきた職員は、「ものすごい土砂降りで、とても来られるような状況じゃなかった」と言っていました。川の水位も、普段なら50センチ上がるのに30分から40分かかると言っていたのが、10分ぐらいで上がってしまいました。この地域だけ土砂降りだったんです。

あれは異常な雲のわき方でした。あれ以降、气象台へ雨雲の状況などを直接聞くようにしています。气象台からも、何でも電話をして下さいと言われてました。それまでは、情報でこの辺は危ないですと言われても、文字の中身までは見通せなかったのですが、電話で確認できると判断に間違いがないですね。

*ひまわりとは、気象観測を行う衛星の愛称。気象衛星からの画像は気象庁のホームページに掲載されている。



ドーンと音がして電車が横転

瓦や角材が水平に飛んだ

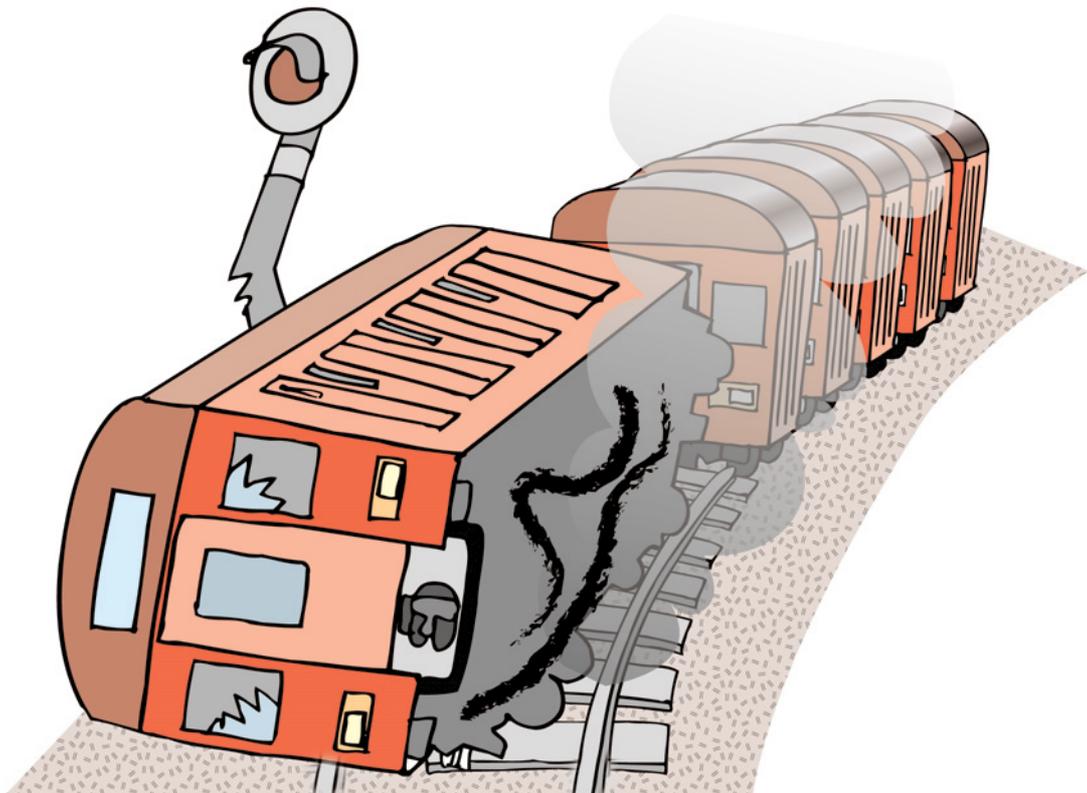
（延岡市 60代 男性）

公民館の窓から外を見ていたら、グワっというものすごい音とともに10センチぐらいの角材が、南から北に向かって、瓦なんかと一緒に水平に飛んで行きました。それに、目の前の公園の植木なども音をたてて折れました。

それは信じられない光景で、アッという間のできごとでしたが、最後にドーンという音がしたので、何だろうと思って、外に飛び出て音のした方に行ってみると、列車が横転していました。

運転手さんの右手から血が流れていたのが、思わずアッと息を飲みました。「大丈夫ですか」と言ったら、さすがプロですね、「はい、乗客のほうも、我々乗務員も大丈夫ですよ」と言われまして、「ああ、助かった。偉いな」と思いました。

赤い車体の電車が脱線して横倒しになっているだけでもすごい絵なのですが、まわりを見渡すと、家の瓦から何からめちゃめちゃになっていました。それも竜巻のシワザとあとで分かったのですが、すぐには何が起きたのか分かりませんでした。とにかく、竜巻の力は想像を超えるものでした。



頭の中に要援護者名簿

すばやく一人暮らしのおとしよりの安否確認

（延岡市 60代 男性）

竜巻が起こったあと、一目散に一番高齢のひとり暮らしのお宅に向かいました。長靴にカッパという出で立ちで、下を向くとポタポタと汗がしたたり落ちるほど、猛スピードで走りました。

玄関の戸を開けると、その方はそれこそ怖いような顔をして座っていました。「大丈夫かい」と声をかけたら、か細い声で「はい」と。あまりのおそろしさに、声も出ないようでした。髪の毛はボサボサですし、足には小さいガラスが刺さって、そこから血も流れていたんです。

2階へ上がってみると、雨戸を突き抜け、ガラス窓を割って、外から飛び込んできたカワラが何枚も部屋の中に重なっていました。ほんとうに信じられない光景でした。

幸い、大したケガもなくすみましたが、もし、そのカワラが頭に当たっていたらと思うと、ゾッとしました。



やじ馬の車整理に大活躍

やっぱり頼れる消防団

（延岡市 60代 男性）

列車の横転事故が報道されたこともあり、竜巻の被害をひと目見ようと、やじ馬が大勢やって来て、町の中は車、車で大混雑になりました。

竜巻の通った場所は、家々のカワラや窓ガラスが根こそぎ飛ばされ、辺りに散乱していましたので、私たちは総出でその後かたづけに追われていました。で、そこへ車が入ってこないように、消防団にお願いしました。

中には、「親戚のところに来ました」とか、「市役所の者です」とかウソをついて、入ってこようとする人たちもいましたが、そこは地元の消防団で、どこに誰が住んでいるかすべて分かっていますから、「そんな人はおらん」と言えるんですよ。

「市役所の人がIDカードも持たず、草履でくるはずがない」と、帰ってもらったという話も聞いています。被災地区の入り口、出口を固めてもらったお陰で、安全を確保でき、現場のあと片づけに集中することができました。



恐かった近所のおばちゃんに「がんばりや」と言われて奮起

（神戸市 50代 男性）

中学生のころ、内緒で繁華街に行ったりすると、かならず近所のおばちゃんが見つかるわけですよ。で、親に言いつけるんですね、「行っとったで」と。そうしたら、必ず親に怒られますよね。だから、まあ、今の言葉で言うと「うざい」存在でした。

でも、今だったらわかるんですよ。そうやって皆さんに監視され、守られていたということがね。やっぱりそういう結構濃密なご近所関係というものがあったから、地震後の復興にもプラスになったんじゃないかなって感じがします。

子どものときに怒られたおばちゃんらに、地震の後は「頑張ってや！」って声かけてもらったり、時にはビールを差し入れてくれたり。この町の復興の区画整理がうまく進まずに、いったん凍結となったとき、近所のおばちゃんから「あんたら、しっかりいな！」とハッパをかけられました。一人前に見てもらったって感じて、うれしかったですね。そういう関係があるから、いまもこうやって、まちづくり活動をやっているんでしょうね。



うれしかったお風呂屋さんでの親切

アレルギーの弟助かる

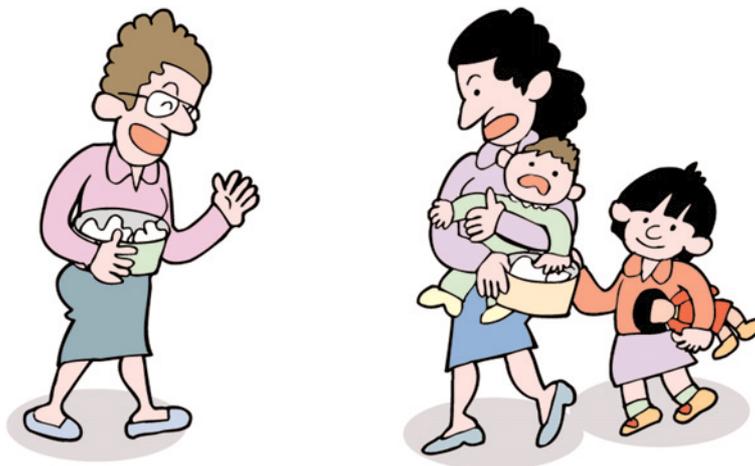
（神戸市 20代 女性 学生）

うちの近所は、皆あいさつとかするし、仲がいいんですよ。地震の時も、弟がすごく幼かったので、衣服を持ってきてくれたり、食べ物を分けていただいたりしたのを覚えています。

弟がアレルギーだったのでちゃんとお風呂に入れなきゃいけないということで、家に水の出ない間、私たち家族はたびたび銭湯に行きました。弟はお母さんが見なくちゃいけないから、私はいつもお父さんと男風呂のほうに入っていたんです。

ある日、お母さんがお風呂から出てきて、「私が赤ちゃん連れていたら、知らん人がお湯を何度も運んできてくれたの。『これ使い、これ使い』ってね」とうれしそうに言うのを聞いて、幼心に、「あ、そうなんや」と感心した記憶があります。

実際、弟に手がかかるので、お母さんとお父さんは、やはりそっちにかけちゃうんですよね。私は、「すごく静かでいい子やった」って言われてたんですけど、実はそんなことなく、それまで一人っ子でほんまに甘やかされていた子なので、「何で、私のこと見てくれへんのかな」ってやきもちをやいてしまうこともありました。



手紙書く場所も作れなかった避難所運営を反省

（神戸市 50代 男性 市職員）

避難所のお世話をしていたある日、中年の男性が一生懸命手紙を書いているのを見かけました。避難所として学校を借りてはいましたが、その場所は避難所エリアの外だったので、「その場所は、ちょっと遠慮してください」と、声をかけてしまいました。

でも声をかけたあとすぐに、静かなところで手紙を書いている人を追いやってしまったことに対して、申し訳ない気持ちになりました。どうして、すぐに学校側に言って、そこを借りてあげられなかったのかと。当時は、手紙が唯一の通信手段でしたからね。

避難所の使い方のルールというのも、あの頃は何もありませんでした。リーダーがしっかりしていたらピシッとなるし、リーダーが悪ければどうしようもないという状況。

震災前から「神戸市ふれあいのまちづくり条例」のもと、地域で福祉的な見守り活動の組織づくりを進めていたところで、当時数で言ったら130ぐらいできていましたかね、その組織ができていたところは、避難所の運営も比較的うまくいってました。やっぱり、地域に顔の見える関係ができていたということが、一番大事だと思いますね。



もっと自治会に参加して！

（宮崎市 60代 男性）

あの水害に対して、国とか県とか市の助成がありましたが、それは非常に助かりましたね。だから自分たちもすることはちゃんとしておかなきゃいかんと、ここで自治会を持っているわけです。

そういう中で一番困るのは、やはり自治会に入っていない方がたくさんいるということです。昔からの村や町はあまり人の出入りがないのだけれど、この辺は新興住宅が増えて、半分都市化してきているものですから。

水害のときも、今日はいくつと前もって市に申し込んでおくと、その数だけ弁当がきて、自治会の役員さんがボランティアと一緒に配布するのですが、自治会に入っていない人も取りにくるんですよ。

自治会としては会員の数しか把握できていませんからね。「用意していない」と言う、「何もしてくれない」とか、そのときだけ権利を主張するんです。やっぱり、できるだけたくさんの人に自治会に入ってもらって、地域の環境整備や子どもの見守り活動とかと一緒に取り組んでいければいいなと思っています。



ないと不自由だったハブラシ

（諏訪市 20代 女性）

防災袋というと、例えば水とか、トイレで使うものとかを思い浮かべますが、そういうものの中には、避難所に行けば支給されるものもあって、意外にタオルとかハブラシがほしかったなと思います。お金はいったん避難してしまえばそこから出られないので、すぐに使うことはありませんでした。

でも、ハブラシって、ないとすごくストレスになるんですよね。会社の同僚にも、ハブラシを買い忘れて、近くのお店まで戻ったおかげで、水がついた道路の渋滞にはまってしまって、帰ってくるのに1時間かかった人がいましたよ。

通常あることがあたりまえなものは、ちょっとしたものでも、ないとすごく不自由を感じるものですね。避難する時に、自分の場合は何が絶対必要なだろうと、考えておいたほうがいいなと思いました。



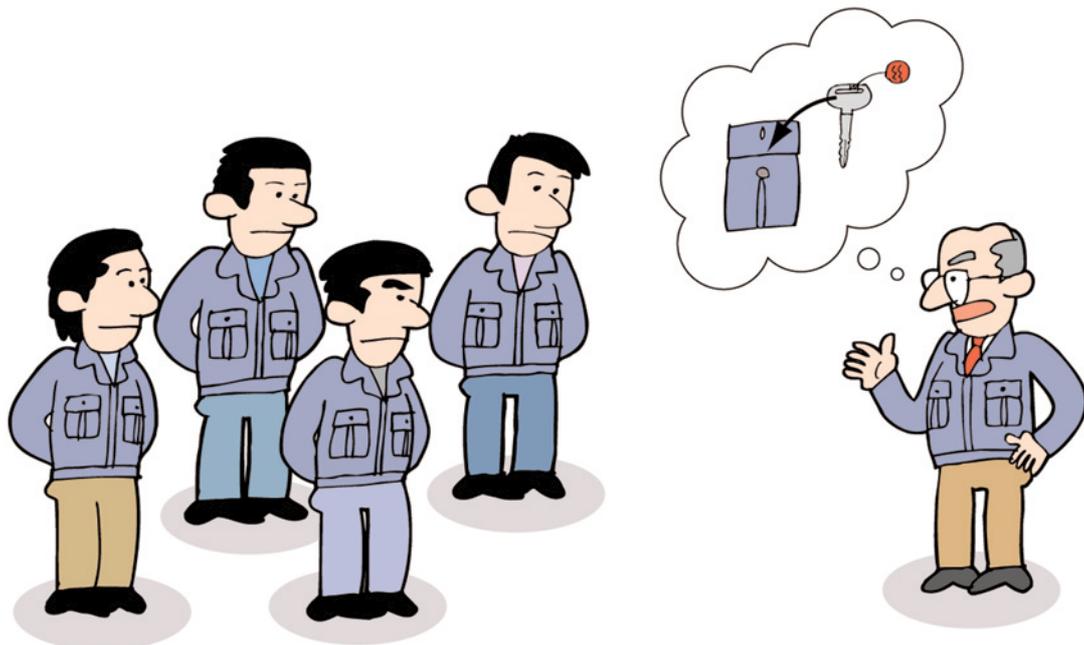
災害に備え、年末には帰宅訓練

（諏訪郡富士見町 50代 男性）

うちの事業所の場合は、従業員の8割から9割くらいが、車で通っています。今回の水害では、交通網が寸断されて県内の全ての事業所が1～2日間臨時休業になりました。これが地震だったらどうかと考えると、通勤経路になっている国道は、断層のところにあって、いつ崩れてもおかしくないところが相当あるんですね。ですから、その国道を使わない経路で自宅へ帰るという訓練を、年に一回、年末の最終日にやっています。

通常で1,300台くらいの車があるんですけども、駐車場から一斉に出ようとすると大変なので、時差をつけて、50分くらいかけて出てもらいます。

寒い時期だと災害が起きたときに、駐車場の車で暖をとることもできるので、従業員には、車のキーをロッカーじゃなくて、自分のポッケにいつもいれておいてくれて勧めています。



1時間で開始、公民館の炊き出し

（延岡市 60代 男性）

救急病院に次から次へと患者さんが運ばれてくるのを見て、消防団員に「災害本部を公民館に設けるから、後を頼む」と言って、公民館に引き返し、すぐに災害本部を立ち上げました。

その時には、もう婦人部の部長さんが来ていて、「区長、炊き出しはどうしますか」と言われました。「そんなこと、おれは全然頭になかったわ」と言ってね。「長引くかもしれんから、頼むわ」と言った1時間後ぐらいには、もう炊き出しが始まっていました。

その部長さんが器材や食材はもちろん、人も20名ぐらい集めてくれましてね。いつもながらのお握りを作ってくれたので、さっそく公民館に避難してきた皆さんに食べていただきました。

炊き出しの手際良さも、被害にあわれた方が公民館に避難してきたのも、いつもやっている防災訓練のおかげだったと思います。



みんなで守る地域の高齢者

民生委員さんと一緒に「見守り隊」

（延岡市 50代 女性）

被災当時、ひとり暮らしのおとしよりは15人でしたが、現在は、18人に増えています。

私たちの地域もやっぱり高齢化が進んでいるんだなと思いますね。

で、「何かのときは、声をかけてください」ということで、近所に住む人が、2～3人1組で「見守り隊」になって、それぞれ決められた高齢者のケアをしています。

おたがいに近所に住んでいますから、何かあったらすぐ駆けつけることもできるし、「近ごろ顔を見ないけど、病気かな」と思えば、すぐにようすを見に行くこともできるんですよ。

あらかじめ分担表ができていますから、みんなの責任感もでてくるし、おとしよりの方も「見守られている」という安心感があると思います。

こういう取組を引っ張る立場として、民生委員*の私もやりがいを感じています。あんまり押しかけて、おとしよりに嫌がられるところもちょっとあつたりするので、そこは気をつけなくちゃと思っています。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



すぐ来てくれた市の相談窓口

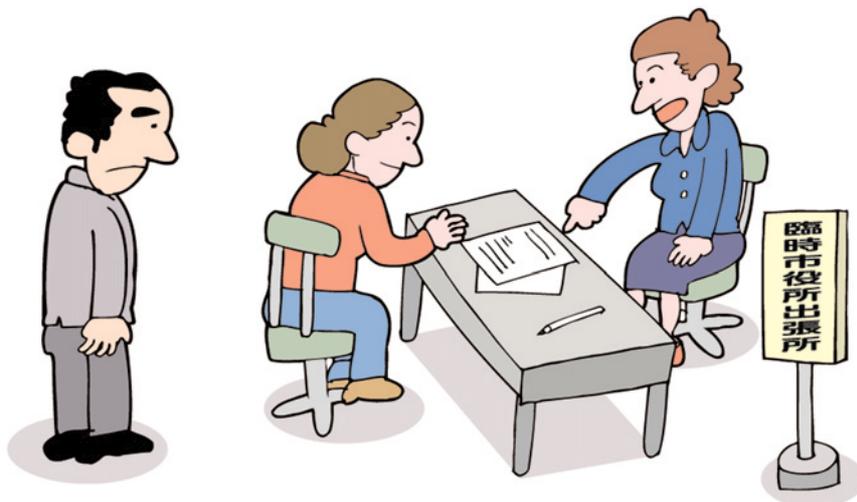
（延岡市 60代 男性）

ひとり暮らしの方が入院されていて、竜巻で家も壊れてしまっているから、その方の罹災証明をとってあげんといかんということで、区長さんとかが代わりにそれをもらいに市役所に行こうとしていたら、「家の修理とかで大変でしょうから」と市役所が出張してきてくれたんです。

当初は、市役所の中の講堂に、各課が集まって対応していたのですが、おとしよりの方なんかはこられないし、きてもずっと待たされる状況になってしまうからということで、7つの地区に分けて出張相談窓口をつくらうということになったようです。

水害の時などにもよくありましたが、市役所に行っても、「これは土木課です」、「これは福祉課です」と次々と回されたりするんですよね。それが、市に防災推進室ができてからは、いろんな面で住民への対応がきめ細かくなってきたなと感じています。

住民の側としても、市役所の人 came からといって、陳情合戦にならないように気をつけたいですね。



バスタオルの防災ずきんでコミュニケーション

（名古屋市 70代 女性）

私たちは、地震対策として一人暮らしの方たちに、防災ずきんの作り方を教えてまわっています。仲間の家で集会したり、商店街の婦人会の方たちを集めたり、教えてほしいと言われれば地域の集会所に出かけていったりして。

そのずきんは、簡単に言うと、どこの家にもあるバスタオルに、軍手や下着類を、しっかり縫いつけちゃうと取れないですから、しつけ糸で荒く縫いつけておき、そこにクッション代わりにもなる尿取りパッド2つを入れてたたむというものです。で、軍手はポケット代わりにもなりますから、その中にお金だとか健康保険証の控えだとかを入れておくんです。

常備薬なんかは、時たま替えなきゃいけないから、外側へ縫いつけますし、中に入れるものはマスクやストッキングなど使う人が自由に選ぶことができます。最後にバスタオルにヒモをつけて縛るようにするんですけど、縛ったところに百円均一のお店で買った笛をぶら下げて、「何かあったらこの笛を吹いて知らせてね」って言って。みんなでおしゃべりしながら作るとお互いの気心も知れるし、地震への意識も高まるので一石二鳥ですね。



一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

板橋区役所 鍵屋 一
防災リスクマネジメントWeb編集長 中川和之
日本YWCA 常任委員 池上三喜子

一日前プロジェクト、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

災害における体験や被災経験を語り継ぐことが、災害体験者や被災者の皆さんには期待されています。そうした体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃると思います。ところが、こうした場やその方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうというのが実情です。ここでご紹介した一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

多くの皆さんは、災害体験・被災経験をお持ちではないでしょう。そうした「未経験者」だからこそ、一日前プロジェクトの場を設けて、聞き手やまとめ役になることをお勧めします。そこでは、被災された方々からさまざまな「思い」を読み取ることができます。同じエピソードでも、聞き手によって違った感慨をもたらします。

災害体験者や被災経験者の皆さんは、なかなか語り継げない本音の話を、一日前プロジェクトを活用して、残していくことができます。

また、一日前プロジェクトで作られた物語を、みんなで一緒に読むことで、体験から学ぶこともできます。ワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部に使うこともできます。文字だけでなく、気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともあるほどです。継続的に紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法は、内閣府のWebサイト「災害被害を軽減する国民運動のページ」にまとめましたので、参考にしてください。

<http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html>

次ページでは、ポイントだけをご紹介します。

□物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2-4人集まっていただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出したり再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても取り上げます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにしましょう。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して、興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう？」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

この3年間、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りをしました。いろいろな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すためにも、聞き取りの場はもっと増やすことが必要です。

すでに、被災地の人びとの言葉で語られた資料などから「物語」を拾い出すこともできるでしょう。それぞれの地元の災害でも、過去にさまざまな記録集が作られ、たくさんの方の身近な体験談があふれていることがあります。これらの資料から、物語を拾い出すことができれば、より多くの方が災害への備えや減災の実践の重要性を実感できるライブラリーになるはずです。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

－簡単な手順を紹介します－

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ



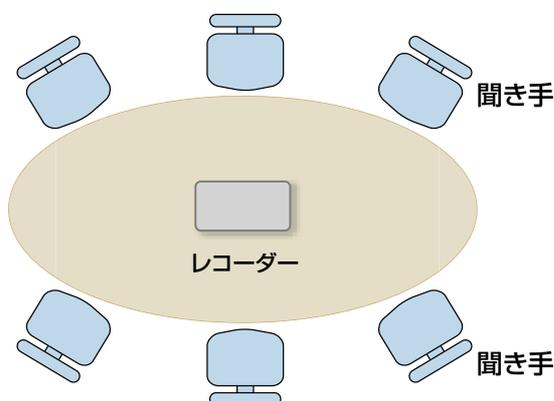
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける



みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間



なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける



テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的



作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう



■発行

内閣府（防災担当）

〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2（中央合同庁舎第5号館）
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>